

# 蒼天の操縦者

バティ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは『蒼天の狙撃手』の裏で行われているちよつとエツちな日常生活を書いたものです。

蒼天のような男が自由奔放に過ごします。主人公は性格が悪いというかDSです。

1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
63	58	53	49	43	39	31	19	9	1

目  
次

## 1話

桜介は部屋で少し飲んでからシャワーに入っていた。

「桜介くん、お姉さんがお背中流しに来たわよ」

そこにビキニ姿の刀奈が入ってきた。

「ああ、ありがとね」

「えっ…」

シャワールームに入った途端、刀奈は鍛えぬかれたその体に思わず目を奪われてしまう。

しっかりと隆起した胸筋、ボコボコに割れた腹筋、その全身に無駄な肉など一切付いていない。

さすがに羞恥心から下半身までじつと直視することは憚られたが、それは紛れもなくどこまでも男の体だった。

「洗ってくれんだろ?」

「そ、そうね」

そうして促されるままに、白く細い指で広い背中にゆっくりと泡を広げていく。

見れば見るほど触れれば触れるほどに男らしく逞しい体つきに、刀奈の胸は激しく高鳴る。

「んっ…。本当にいい体してる…」

優しくなぞるように洗う手つきに、桜介は下半身がムズムズとした感覚を覚えた。

やがて少しだけ考えてから、桜介は自身の希望を率直に提案することにした。

「胸で洗ってくれる?」

「なっ!?なにをっ!そ、そんなこと、出来るわけないでしょ!」

いきなりのとんでも発言に刀奈はおおいに狼狽する。ちよつとからかってやろうと思っただけで、まさかそんなことを言われるとは想像すらしていなかった。

いつもならこれが冗談で済んだだろう。しかし今日の桜介は少しアルコールが入っている。

「いいだろ」

「で、でも…」

顔を真っ赤にさせて、本気で困惑している刀奈に淡々と再度促す。

「やっつけてくれる?」

「……女たらし」

刀奈はいつもと違う、甘さを含んだような声に簡単にまいってしまふ。それに口調だけは優しいものの、振り向いた男の目がたしかにやれと言っていた。

どこか女の扱いに慣れたような態度が気に入らなくて小さく憎まれ口を叩くが、結局は言われた通りに背中をその豊満な胸でゆっくり擦り始める。

「んっ…んんっ…」

色っぽい吐息を漏らしながら、懸命に大きな背中に胸を擦りつける。そのたびに豊満な乳房は形を歪め、敏感な先端が布に擦れて、だんだんと息が荒くなっていく。

少しだけ、もう少しだけなんだから、なんて自分に言い訳しながら、刀奈の興奮はどんどんと高まっていった。

「ああん、ああっ、ふうん…」

首にしがみついて柔らかな胸をぐにゆりと押し当て、何度も何度も体を上下させては、そのたびに相手の耳元で熱い吐息を漏らす。

「なんかすげえエロいな」

「ば、ばかっ…」

そんな風に初心な態度で健気にご奉仕されては、桜介もだんだんと冷静さを失っていく。

しばらくすると桜介は振り返り、自分の欲望を素直に口に出した。

「その水着いららないよな」

「えっ!?だ、だめだめっ…!」

「いらないな、脱ごうか」

そう決めつけられても、呼吸を乱したまま刀奈は首を横にぶんぶん振る。

それはいくらなんでも冗談の域を越えている。

しかし本当にさせようとしてるのがわかったので、なんとか説得しようとして正面に回って首に腕を回し、上目遣いで見つめた。

「だめよ……そんなの」

か細い声でまるで媚びたように小さく呟く。実は裸で触れあうのは別に嫌ではなかった。

ただやっぱりまだ恥ずかしさが残っていて。また自分から脱ぐのはなんだかはしたくない気がして、かなり抵抗があった。

「だめじゃないだろ」

「う……」

脱がせるなら勝手に脱がせて欲しい。なんとなくその方がまだ恥ずかしくないような気がした。

しかし刀奈のそんな思いも、相手には伝わらない。

「自分で脱げるだろ？」

「う、うん……」

それがわざとなのか、それともたまたまなのか、それはわからないが結果的に、刀奈が一番羞恥心を煽られる形になる。

刀奈はもう諦めて観念したように背中に手を回し、ビキニの紐をぱらりと外す。

それから押さえていた両手をゆっくり外すと、ぷるんと瑞瑞しいたわわな豊乳が男の目の前で露になった。

「おっぱい大きいねえ。それに綺麗だ」

「ううっ……」

刀奈はカアアアと熱くなった顔を隠すように、男の胸板に顔を押し付けてぎゅつと抱きつく。

その反応がまた可笑しくて、それに可愛くて男の欲望をさらに引き出していく。

「先輩、前も洗ってよ」

この先輩は羞恥心を煽るためなのか、こういうときはあえて刀奈を先輩と呼ぶ。

刀奈がいつも年上ぶって、すぐに主導権を握りたがるのをわかっているからだ。

「い、いや、そんな風に呼ばないで！」

「いつも自分でおねえさんって言ってるだろ。じゃあおねえさん、胸で俺の体洗ってもらえる？」

普段気が強くてプライドの高そうな年上の女が、年下の男に言うがままだにされる。

それが相手の羞恥をひどく煽ることになるのを男はとつくに知っていた。

実際後輩に好きなように命令される自分自身に、刀奈は恥ずかしくて顔から火が出そうだ。

「はあ、んんう、ふうん、こ、これでいいの？」

それでも何故か逆らう気は起きなくて。とても逆らえる気がしなくて。

刀奈は顔を真っ赤にさせながら、言われた通りに泡まみれの豊かな胸を両手で寄せ、ぐにゅぐにゅ押し当てていく。

「いいけどね、もつと強く擦ってくれ」

「そ、そんなっ！そんなのっ！」

刀奈はすっかり涙目で、それに精一杯抗議する。男の裸を見るのも初めてなので、色々ともう限界だった。

「そんなこと言わないの。頑張っておねえさん」

「うううう。わ、わかったわよお…」

頭を撫でられながら人懐っこい笑顔で言われて、やっぱり逆らえなくて、刀奈はどこか甘えた声で返事をした。

そして、その大きな胸をさつきよりも強く激しく、押し付けながら体を必死に上下させる。

「おねえさん、気持ちいいよ」

軽口を叩きながら、少しの間黙ってその行為を楽しんでいたが、突然お尻に手を伸ばすと両手でそれを鷲掴みにする。

「ひゃ、ひゃん!？」

「柔かいね、お尻も」

柔らかくて肉感のあるその引き締まったヒップに、武骨な指が面白いように沈んでいく。

「だ、だめ、そんなの、いいって、い、言っていないわよ!?!」  
「でもいいんだろ」

もう遠慮などなにもなかった。ポリウムのある尻に指を何度もぐにぐにと押し込む。

やがてその刺激に耐えられないのか、刀奈が胸板に頭を押し付ける形でもたれ掛かった。

「くふう…! ああ…あああつ!」

「どうした洗えよ。気にせず続けるんだ」

「くつ! やっぱりドSじゃないのお、ばかあ」

刀奈は唇を噛み締めて、男が楽しむための行為を続行する。しかしもう足が震えていた。だから両手を男の首に回してすがり付く。

それでも動きは止められず、体を上下させるたびに敏感な乳首が擦れて嬌声が漏れる。その間も、お尻は男の大きな手で好き放題に弄ばれていた。

「ああつ…あつ…んんつ…」

「刀奈って敏感なんだ?」

「し、知らない」

桜介はくくつと笑いながら、もうわかっていることを今さら気づいたことのように言う。

この男はそうやっていつも自分の反応を楽しむことを、刀奈はもうすでに知っている。

それに悔しさを覚えながらも、刀奈の下腹部はもうどうしようもないほどに湿っていた。

「はあはあ…。桜介くうん…気持ち…いい?」

「すげえいい。もつとしてくれ」

胸を擦り付けながら瞳を潤ませて、上目遣いで媚びたように聞いてくる刀奈に、桜介はゾクゾクするような快感を覚えた。下半身はもうすっかり剛槍と化している。それが刀奈が動くたびに刀奈のお腹にグリグリと当たる。

「あ、や、当たってるのよお」

刀奈は少し前から自分に押し当てられているそれに気づくと、興奮

をさらに高めて動きを速めていく。その白い肌は全体的にうつすらとピンク色に染まっついて、口からは時折熱い吐息を漏らしていた。「もういいよ。今度は俺が洗ってやるよ」

耳元で何度も熱い吐息を漏らされ、豊満な体を擦り付けられながら、すぎるような視線を向けられ続けたら、男はたまったものじゃない。桜介は内心もつたいたいなと思いつつも、ここでそれを中断させることにした。

桜介はおいでと言いつつ椅子に座ると、刀奈に自分の上に座るよう促した。

「や、やだっ！」

言葉だけの拒絶をしながら、刀奈はこのあとのことを想像して生唾をゴクンと飲み込む。だが男には、それがすでに形だけの拒絶だとかかっていた。大丈夫と囁いて、そのまま刀奈を抱きかかえ、自分の膝の上に股がるように座らせる。

「いつもどこから洗うのかな？」

そんなふう言いながら、まずは刀奈の引き締まったお腹や腰のくびれを堪能し始める。遅い男の大きな手が刀奈のなめらかな柔肌を好きなように撫でていった。

「だ、だめ、だめよ……！桜介くん、ああっ！」

「だめじゃないだろ。今のお前はこんなにいやらしい顔してるのに」「っくっく……！み、見ないで！」

後ろから顔を覗き込まれると、刀奈は感じてる顔を見られたくなくて、あわててパイツと顔をそらした。そんなうぶな反応が可愛くて男はもつと煽ることにした。

「あとはいやらしい声も、もつと聞かせて欲しい」

桜介はそう言って刀奈の胸に触れると、ゆっくりと乳房を手のひらで撫でていく。今まで誰にも触らせたことがないそこに触れると、刀奈はその身をビクビクさせながら、口を両手で塞いで声を漏れないように我慢し始めた。

「んんっ、ふうん、んー！」

桜介はそんな刀奈の反応を楽しみながら、優しく可愛がるように揉

みほぐしていく。手のひらの上で弄ぶと刀奈のプツクリと膨らんだ乳首がピンピンに隆起して激しく主張を始めた。それを確認しながらも、まだそこには触れない。美味しいものを最後に食べるように、そこは大事にとっておくことにした。

「気持ちいいか？」

「んうー！いい、言わせないで…っ！」

声を抑えながら激しい快感に耐える刀奈に、桜介は優しい声で囁く。ついでに耳元でふくと息を吹き掛けると刀奈は身体をブルブルと震わせていた。

「んー！んんうー！んふうー！」

「可愛い声もつと聞きたいな。そろそろ手離せよ」

眉を寄せて一生懸命に快感に耐えていた刀奈は、言われてしまった言葉に顔だけで振り返った。桜介にすぎるような視線を向けて首を横にぶんぶんと振って拒絶の意思を示す。しかしその間も、桜介のやわやわと撫でる手は止まらなかった。

「刀奈」

まるで悪さをした子供に、言い聞かせるような口調だった。それと同時に咎めるような視線を向けられると、刀奈は諦めたように抵抗をやめ、口に添えていた手をそつとおろす。この男の聞きたいと言うのは、聞かせろと言う意味なのはもう身に染みてわかっていた。豊富な乳房は桜介が押し込んだり持ち上げたりするたびに、ぐにやりと形をかえる。好き放題に弄ぶたびに刀奈の体がビクンビクンと跳ねる。

「乳首たつてるじゃないか。もう興奮しちゃった？エツチだねえ」

「うう、い、意地悪う、あ、あんっ！」

人差し指で尖った先端を軽く弾くだけで、刀奈は体を大きく仰け反らせる。桜介はクリクリと円を描くように人差し指で乳首をいじりながら、乳房を少し強めに揉みしだいた。そして手だけではなく、白い首筋にも舌を這わせて刀奈の味を堪能する。

「あれ、どうしたのかな？刀奈ちゃんは。そんなに震えちゃって…」

「お、桜介くんは、いじめられて、あつ、私の反応を、た、楽しんでるんでしょお、バカあ…」

あからさまな煽り文句に、刀奈は快感に体を震わせながらも振り返り、キツと睨みつけた。

「ご名答。その通りだよ」

気が強い女も反抗されるのも大好きな桜介は、楽しそうに笑うと、刀奈の勃起している乳首をきゅつと摘まみながら、耳を甘噛みする。敏感な刀奈はその強すぎる刺激に端正な顔を歪めて、ふるぶると震えながらも精一杯の強がりをおにした。

「いつか、わ、私にメロメロにして、必ずっ、貴方を、私のものに、してやるんだからあ……！」

「ふ……。本当に負けず嫌いだな、あんた」

——だが、それがいい

桜介は嬉しそうにそう言っつて、乳首を強めに摘まむと、華奢な首筋に思いつきり吸い付く。

「あっ……い……あああああっ……！」

それだけですでにギリギリまで高ぶっていた刀奈は、大きな嬌声をあげて限界に達する。体を痙攣させながら、ぐったりと後ろに倒れそうになる刀奈。

「いつか……ねえ。そいつは……楽しみだ」

桜介はそれを抱きとめると、そのまま抱えてシャワー室を後にした。

## 2話

その日、刀奈が部屋に帰ると部屋には誰もいなかった。

桜介はまだ帰っていないと判断した刀奈はYシャツと下着だけ残して制服を脱ぎ始めた。

そして今はベッドでゴロゴロとしている。

「うーん、やっぱり桜介くんは多分コスプレ好きなのよね…」

刀奈は注文しておいた箱をタンスから取り出すと、箱を開けて猫耳カチューシャと尻尾を着けてみた。

「これで誘惑すれば桜介くんもきつと私に夢中よ」

こうして刀奈はいつものように、頭の中で激しい妄想を開始する。

『ニヤア』

『可愛い猫さんだ』

『ニヤアニヤア』

『ははっ。あんまり可愛いと襲いたくなっちゃうよ』

『ニヤア?』

『美味しく頂いていいんだな。それじゃあ頂きます』

『あっ…!にやあぁ〜!』

こんな男はどこを探しても存在しない。だが刀奈の頭の中では桜介はすっかりこんな男になっていた。

「だ、ダメよ!桜介くんたらあ!もうっ!」

ベッドの上をゴロゴロ転がって悶える刀奈。

「あのさ、お前…何やってんの?」

刀奈がゆっくりと声のした方を振り向くと、シャワールームから出てきた桜介が無表情で立っていた。上半身裸で下にはボクサーパンツを履いている。

「ぎゃあ!」

刀奈は慌ててベッドから飛びのくと、ジリジリと桜介から距離をとった。

「…で?何してんの?」

ゆっくりと近づいてくる桜介に、刀奈はあっという間に壁際まで追

い詰められてしまう。

「そ、それはっ…。な、なななっ、なんでもないわよっ!」

悶えて転がってるところを見られた恥ずかしさと、逞しすぎる体を直視出来ないこともあって、刀奈は赤面した顔を慌てて背けた。こんな態度をとれば、なにかを隠していることは誰にでもわかる。刀奈はしばらくそっぽを向いていると、頬に手を伸ばされて少し強引に正面を向かされた。

「ほう?それにしても可愛い猫さんだ。あんまり可愛いと襲いたくなっちゃうよ」

「~~~~っ!」

その言葉に刀奈は頭から湯気が出る程に顔を紅潮させ、口をパクパクとさせた。

「どうか…したのかな?」

刀奈がようやく目を合わせると、桜介はニヤニヤとしたい笑顔で浮かべていた。口元もしっかり緩ませて心底愉快そうに笑っている。

「も、もしかして…こ、声に出てたり…とか…?」

俯いてプルプル震える刀奈は小さな声で恐る恐る尋ねると、桜介は首を横に振ってたんたんとその質問に答えた。

「いや…なんのことだ?それより美味しく頂いていいんだな。頂きます」

「いやああああ〜」

絶叫が室内に響き渡った。もう顔を見ることも出来ず、俯いたまま男の胸に頭をすりすり擦り付けて、刀奈はひたすらに悶え続ける。「いつもそんなこと考えてんの?怖いな〜」

「うう…」

「たっちゃんエッチなんだね〜」

「ううっ!」

「もしかして欲求不満なのかな?いやあ困った。襲われちゃうな〜」  
「う~~~~っ!!」

性格の悪い男はニヤニヤと本当に嬉しそうに次々と煽ってくる。するとやがて刀奈の羞恥心が限界に達してしまった。恥ずかしすぎ

てもう何も考えられなくて、頭が真っ白になった刀奈は、黙って桜介を自分のベッドに押し倒すと、その上に股がった。

「…なにやってんの？なにを…」

暴走した刀奈はその質問には答えず、男の鍛え上げられた裸の上半身をペロペロと舐め始めた。刀奈のいきなりの奇行に、さすがの桜介も少しだけ狼狽えてしまう。

「ちよ、いきなりなんなの？」

「ニャア〜」

「ニャアじゃねえだろ。撥つたいんだよ」

そう言いながらもちよつと気持ちいいなと思って、桜介は自分の体をペロペロ舐めている刀奈の猫耳頭を撫でていた。刀奈はペロペロと舐めながら、愛しそうに胸板に次々とキスを落とすしていく。桜介は次に尻尾を握ってみる。

「にゃ!?!にゃあ、あんっ…んん〜っ!」

なんでだろうか。尻尾を握られると刀奈は声を上げて力が抜けたようにくたつと倒れこんできた。この女、完全に猫になりきってやがる。桜介が驚いているとしばらくして、また刀奈が口づけを開始した。やがて桜介の口から小さな吐息が漏れる。男の口から漏れる熱い吐息に心臓が激しく高鳴り、刀奈はさらに口づけに夢中になっていく。もう諦めた桜介は、この状況を楽しむことにした。Yシャツの上から刀奈の乳房をフニフニと感触を確かめるように揉みしだく。服の上から触るそれは、少しごわごわとしていたが、布越しでもある程度のやわらかさは伝わってきた。

「あ、んう、ちゆ、んふっ、ちゆ」

豊富な乳房を大きな手で揉みしだかれると、もともと敏感な刀奈はすぐに体をピクンと跳ねさせる。それでも刀奈は止まらず、息を荒くして男の体に必死に舌を這わせた。

「やつぱりくすぐってえな」

刀奈は頭を撫でられながらそう言われると、今度は男の逞しい胸筋の中央、乳首を舐めはじめた。

「おいおい、こんなエッチな猫はいないだろ」

「んっ、ちゅ、エッチな猫は嫌い？」

「嫌いじゃないけどね」

そう言うのと、男はYシャツのボタンを外して刀奈を下着姿にした。上半身を起こして自分の上に股がっっている刀奈と向き合う。そしてポーツと熱に浮かされたように見つめてくる刀奈に問いかける。

「そんな格好までして…。そんなに可愛いがって欲しかった？」

「う、うん…。か、可愛いがって…」

そう言いながら、顔を朱に染めて視線を逸らす猫。自分になつく可愛い猫のその答えに、飼い主は満足そうに笑うと、白い首筋に唐突にかぶりついた。

「ああっ、ふうん、ああ…」

飼い主の舌が首筋から鎖骨を通り、徐々に下へ下へと進んでいく。舌はやがてブラの上から露出している上乳に到達すると、そこを重点的に舐め始めた。甘い匂いがするその胸に飼い主はどんと夢中になっていった。その口はやがてブラの上から乳首に吸い付く。吸い付かれた猫は体を震わせて飼い主の頭を抱えるようにしがみついた。飼い主が吸い付きながら舌を動かし始めると、猫のしがみつく腕の力が強くなる。

「ああっ、くうん、ああん…！」

「ブラ、外していいか？」

「し、知らない」

問われると恥ずかしそうにふいっと顔を逸らす刀奈。桜介はそれを了承ととった。すぐに背中に手をまわしてパチンとホックを外す。大きく形のいい白い乳房がぷるんと露になった。薄いピンク色の乳輪の中心には、既に勃起している乳首がピンとたっている。

「相変わらず美しいな」

「や、やだー」

刀奈はストレートな誉め言葉が、余計に恥ずかしくて両腕を交差させて胸を隠した。いちいちそういう反応をするからいじめられるのに、それを知らない刀奈はいつだって一生懸命にそういうことをする。桜介はそれが可愛くて仕方ない。

「そそるんだよね。そういうの」

「あつ、ああつ、そこは…っ！」

桜介は腕をそつとどかして、人差し指の腹でツンツンと乳首をつついた。それだけで、刀奈は体をビクビクと震わせる。人差し指と中指でキュツと先端を摘まむと、体を仰け反らせて喘ぎ声をあげる。相変わらずの敏感な反応がやっぱり楽しい。

「今からお前の美味しそうな胸を、じっくりと味わうつもりだが別にいいよな」

「あ、あ、い、いいよ…っ」

許可をもらったので、乳房を掴んでから見せつけるように舌を出した。顔を見ながらゆっくりと舌で撫で上げると、刀奈はすぐに顔を歪めてあえぎ声を出し始める。刀奈は顔を逸らしていたが、途中で目が合うと頬を赤く染めて瞳を潤ませた。

「恥ずかしがることないだろ。大きさも形も、味だつていい」

「んんっ…！はうんっ、そ、そんなこと、言われても…っ」

誉められると刀奈は困ったように眉をハの字にさせて、悩ましげな声を出した。どうしてわからないのだろう。本当に素晴らしい双丘だ。思わずむしやぶりつきたくなる。

「ひゃあっ！だ、だめえ、吸っちゃだめっ…！」

体をガクガクさせながら、弱音を漏らす刀奈の反応を楽しみながら、乳首を吸い、舌でも弄ぶ。ぷっくり固くなっているそれを舌で転がしながら、両手で乳房をやわやわと揉み、時折甘噛みも交えてじっくりと責めたてていく。

「や、噛んじゃ、や…っ」

「美味しいねえ」

「や、優しく…優しくして…っ」

震える手で頭を押さえ、悲鳴を漏らしてもそんなものはD.Sの男には、ただの興奮を駆り立てるスパイスにしかならない。余計にいいめたくなってしまうだけだ。そうやって少しの間好きなように弄ばれていると、刀奈は簡単に達してしまふ。

「ああ、やだやだ、やだあ…！あああああつ…!!」

刀奈は体を痙攣させると、そのまま体勢を崩して胸板に体を預けるように寄りかかった。熱い吐息を漏らして甘えるように抱きつくが、桜介はそれぐらいでエッチな雌猫を可愛いがるのをやめるつもりはない。焦点の定まらない瞳を向けてくる刀奈の体の向きを変え、背中を向けさせると体を自分に預けさせる。そして足を開かせ、強制的にM字開脚させた。

「えっ!?!桜介…くん?」

「こつちも可愛がらないと、だめだろ?」

「う、うそ…!?!今は…その…び、敏感になってるから…だめ…っ」

涙目で懇願する刀奈は男を余計に駆り立てる。煽られた男はもう楽しくて仕方がない。下着の上から指で陰唇をなぞるように触ってみる。指で確かめると刀奈の下着は既にまるでお漏らしをしたように、ぐっしより濡れていた。

「ほら、こんなに濡れてる。どうして?」

「やっ!い、言わないで、ひいん!ああっ!」

「足を閉じるな」

「い、いまは、敏感になってるの、だ、だから、だから、だめっ!」

「それは俺には関係ないだろ」

最初から刀奈の泣き言など聞くつもりなどない。閉じた足を強引に開こうと手を伸ばすが、閉じられた足には大した力が入っていない。それに気づいて桜介は口角を緩めた。

「自分で開いて見せろ」

「そ、そんな…っ!」

「お前、本気で嫌がってないだろ…」

「そんなことっ…!」

「あんまり焦らすな」

「っ……………」

そう言われると観念したのか、俯いたまま自分からゆっくりと足を開いた。桜介が濡れているところを中指で撫でるように上下させる。指が陰核を通過するたびに、刀奈は甘い嬌声をあげた。それを続けていると布越しの刺激がしだいに物足りなくなったのか、刀奈はもどか

しそうに足をすり合わせ始めた。

「あん！んっ…んう…あっ…桜介くん…っ」

「どうかした？」

「お願いだから…焦らさないで…っ」

「直接がいいの？」

「そ、そうなの、触って欲しいの」

素直にお願いするなら直接触ってあげるは別に構わない。でも一つだけ、桜介には気になっていることがあった。だからお願いを聞いてあげるのは、それをきちんと確認してからだ。

「猫はニャアって鳴くんじやないのかな？」

「くう、にゃあ…！んふう、にゃあ…っ!!」

これは可愛い猫のお願いだ。そういうことなら飼い主としてちゃんと聞かねばならない。下着の中に手を入れてクチユクチユといやらしい音をたてながら、直接割れ目を擦っていくと、刀奈は与えられる刺激に顔を歪めた。

「自分でするのとどっちが気持ちいい？」

「そ、そんなの…！」

「なあに？」

「…あなたの方がいいです…っ」

問いかけると顔を真っ赤にさせて、小さな声で呟いた。指を上下に滑らせているうちに、首を振って快感に悶えている刀奈の両手が自分の秘所をいじる腕を掴んでくる。そんな仕草も堪らなかった。それだけでもっといじめたくなる。今度は試しに耳の中に舌を出し入れさせてみると、刀奈の全身がガタガタと震え出した。

「あ、あ、あ、そ、それは、いや、いや…っ！」

「お前のいやはもっとしてっ…っことだよな」

「そんなのっ…や、やめなさい！ふざけるのは…っ！」

刀奈の言葉を自分の好きなように解釈して、制止は聞かなかつたことにした。別にふざけてなどいない、真剣にいじめているんだ。秘所をいじっていない方の手でしっかりと顔を固定し、耳の中に舌をゆつくりと入れてはゆつくりと出す。それだけで刀奈は瞳に涙を浮かべ

て、ゾクゾクと肩を震わせ始めた。

「あつ、あつ、あつ、やあ、やめて、ほんとにやめてえ…！」

「やなの？」

「う、うん、やつ、やなのお…っ」

「そうか…もつとして欲しいんだな」

「ふああ…っ！お、お願い、耳は、だ、だめ、だめだよお…っ」

刀奈は甘えたような声で必死にそうお願いするが、それはあつさりと聞き流される。敏感な耳に強引に舌をねじ込まれると、刀奈はもうその責めに耐えるしかなかった。泣きついても聞いてもらえない。むしろそれは逆に喜ばせるだけだった。この年下の男に、まるでおもちやのように好き放題に弄ばれていることはすでに自覚していた。それでも責められるとすぐに媚びたような態度をとってしまう。そんな自分自身に悔しくて腹が立ったのも事実だ。それでも憎たらしいこの男には全く逆らえる気がしない。この男は生粋のDSだ。反抗すれば喜び、泣きついても喜ぶ。しかも質が悪いことに、そういう時に見せる嬉しそうな笑顔を見ると、それだけでもう怒りなどどこかにいってしまう。それどころか嬉しい気持ちまで勝手に出てきてしまうのだから、もうどうしようもない。そしてそんな自分も悪くないと思ってしまうのだ。だから本当にどうしようもない。これでは最初から逆らえるはずもない。

「うああっ…！も、もう、もういいにして…っ！」

「だめ」

こんな感じですつと耳と秘所を同時に責められ続けて、刀奈はもうおかしくなりそうだった。

「あああ、あはん、にやあん、んんう…！」

「ほら、ここはクチュクチュ言って喜んでるぞ。いやらしい猫さんだ」

「くう、よ、喜んでえ、なんかあ！んんう…んんう…！」

陰核を撫でては割れ目を擦っていく指使いに、刀奈はまたもどかしてどうにかなりそうだ。自分から腰を動かして陰核を指に擦り付けても、それだけじゃとてもイケそうにない。しばらくしてわざと焦らされているのがようやくやくわかれると、唇を噛み締めて焦らし続ける相手

をキツと睨み付けた。

「そんな涙目で睨まれても怖くない」

「んんっ……はあ……っ！意地悪しないで……っ」

「最初に焦らしたのお前だ」

「そんなことお……してない……っ」

「じゃあもういいから、おねだりしてみろ」

「っくっ！そ、そんなの、出来るわけ、あああ……っ！」

喋っている途中で陰核を撫でられると、刀奈はビクツと快感に体を震わせた。そのまま尖った部分を優しく撫でられ続ける。しばらく熱い吐息を滲ませてから、助けを求めるとような視線を向けた。

「ねえ……っ。ねえ……。やだ……っ」

そんな甘えん坊の刀奈を、桜介は冷たい表情で見下ろした。甘えればなんでも言うことを聞くほどお人好しではない。それを見て刀奈はすぐに抵抗することを諦める。やれと言われればやるしかないのだとようやく理解した。結局いかせて欲しかったら、自分からはしたなくおねだりするしかないのだ。そうしなければきつといつまでも焦らされ続け、やがて気が狂いそうになるだろう。だから刀奈は執拗な焦らしに限界を迎えている自分の体に素直に従うことにした。決してこの意地悪な年下の男に従うわけじゃない。自分の中でそんな無理な言い訳をしながら、刀奈は顔を真っ赤させ、瞳を潤ませ、ついにお願いを口にする。

「お、お願いだから、もう、もう……っ！」

「なんのお願いかな？」

「お、桜介くうん……お願い……いききたいのっ……っ！もう……ダメなのっ……っ……っ……い、いかせて……ください……っ……っ！」

「ふふふ、よくできました」

最後の方は声が小さくなっていたが、きちんとしてお願いに桜介はとりあえずは満足した。陰核を指でキュツと摘まんだり弾いたりすると刀奈の身体がビクンビクンと大きく跳ねる。それから突起をクリクリとこねながら耳元で囁くと、刀奈はやっと二度目の絶頂を迎えることが出来た。

「お前がいくところ、ちゃんと見ててやるから」

「やあ！こ、こんなところ、見ちゃだめえ！だめ、だめ、だめ！やああ  
…っ!!」

言葉通りそれをきちんと思届けると、その体を後ろから抱き締め  
た。

### 3話

その日、桜介は不機嫌だった。

大事に飲もうと部屋に置いていたウイスキーを、勝手に捨てられてしまったからだ。

「いい加減に機嫌直しなさい」

「……」

何度も声をかけられても桜介は返事をせず、ただ黙って日本酒を飲んでいた。

「また…買ってくればいいじゃない」

「……北大路さんにもらったやつだったんだよ」

「あなたって…本当に人脈のムダ遣いよね」

「……無駄なものなんてねえんだよ。俺のウイスキーとか」

顔を背けたまま、コップの日本酒をグイッと飲み干した桜介を見て、刀奈は大きいため息を吐いた。今までなにかしても桜介が根に持つことなどなかった。こんなに不機嫌なのは、本当に楽しみにしていたからなんだろう。飲酒には基本的に反対だったが、少し悪かったかなという気持ちで刀奈の中で芽生えてしまう。それが間違いの元だとは知らずに。

「もう！何でも言うこと聞くから許して。ね？」

その言葉に桜介の体が初めてピクリと動いた。それはもう、ものすごい反応速度で。

「何でも……」

刀奈はあまりの反応に身構えてしまう。もしかして、とんでもないことを言ってしまったんじゃないだろうか。

そんなことを考えて、刀奈は一つ予防線を張ることにした。

「ひ、一つだけよ、一つだけだからね！」

「あいよ〜」

桜介の機嫌はもうすっかり直っていた。

刀奈は要望に答えて、ミニスカートのメイド服に着替えていた。桜介は今まで刀奈のコスプレをたくさん見てきたが、中でもメイド服がお気に入りだった。この男、コスプレはするのも見るのも好きだった。

「き、着替えたわ。どうしたらいいの?」

恐る恐る聞いてくる刀奈に、桜介は後ろから近づくと耳元で囁いた。

「ワカメ酒って……知ってるか?」

耳元でそう言われると、刀奈の頬が一気にボロボツと真っ赤に染まる。刀奈はそれがどういうものかを知識として知っていた。もちろん自分がそんなことをする羽目になるとは夢にも思っていなかったが、桜介は酒のお返しは酒で返せばいいかと安易に考えていた。

「へ、変態……! すけべ! バカっ!」

刀奈はそんなことを考え付く桜介に罵倒の言葉を吐く。実際にそれを想像したのか、もう耳まで真っ赤になっていた。

「さて、どうするんだ? パンツは脱がせてやろうか? それとも自分で脱ぐのかな?」

「うう……。そんな……! じ、自分で脱ぐ……」

「ふーん、そっちにするんだ。てっきり脱がせてなんて甘えてくるかと思ってたけど」

「だ、誰がそんなこと言うもんですか! 本当に変態なんだから……っ!」  
「そうか、残念だ。それじゃあどうぞ」

突然のめちやくちやな提案だが、男は最初から断られることは考えていない。それに断らせる気もない。決定事項かのように告げるとその言葉を受けて、刀奈が自らスカートの中へと手を入れた。ピンクのショーツに手をかけてゆつくりと脱いでいく。刀奈は羞恥でもう首まで真っ赤に染まっていた。刀奈はうきうきしながらそれを眺めている男を、瞳に涙をいっぱい溜めて睨む。それが逆に男の加虐心を煽っていることも知らず。

「エロいパンツ履いてるな。それも着替えたのかな? このために……」

「やだ、着替えてなんか……」

「本当は…?」

「……………き、着替えました」

刀奈は顔を背けてそう呟いた。そのまま少しずつつ脱いでいたが、ショーツが太ももの途中までくるとその手が止まってしまふ。もう相手を睨んでいたその表情は、眉をハの字にさせて困ったような、助けを求めるようなものへと変わっていた。

「どうせ全部見るんだ。俺が手伝ってやるよ」

「や、やだ! やだやだっ」

桜介がいよいよやと首を振る刀奈をじつくりと眺めながら、ピンク色のショーツを脱がせていく。それを脱がし終えると、すぐに刀奈の頭が胸の辺りへと寄りかかってきた。その様子を伺うと、刀奈はスカート裾を握りしめたまま、俯いてしまっていた。

「どうした? 甘えてもダメだけどね」

「もう許して……………」

蚊の鳴くような声だった。それで許してもらえとは思っていない。でもお願いするしかなかった。刀奈は恥ずかしさでもういっぱいいっぱいだった。

「そんなこと言って好きだろ、お仕置きされるのも…」

「そ、そんなの…好きなんかじゃ…」

男の胸に頭をぐりぐりと擦り付けて、ぽしよりと呟く。

言葉では否定しながらも、その行動はすっかり甘えていた。刀奈が何度も頭を擦り付けていると、優しい手つきで頬を撫でられる。

「ん……………」

頬を撫でられて気持ちよさそうに目をつぶっていた刀奈は、撫でられている手が途中で止まってしまふと、顔を上げて上目遣いで男を見つめた。

「桜介…くん?」

「そろそろ刀奈の大事なところ、見せてくれる?」

「でも……………恥ずかしいのっ」

刀奈は一度元に戻っていた顔色を再び真っ赤にさせ、また俯いてしまった。今までそこを触られることはあっても、まじまじと見られた

ことはまだなかった。

「俺には…見せられないか？」

「そんな…っ！そんなことない…！」

卑怯な聞き方だ、本当に。そんな言い方をされたら断れるわけがない。それをわかってて言ってるなら、ひどい男だ。しかしわざとやってるのかはわからず、刀奈は本気で困ってしまう。

「どうしても嫌ならやめるけど、やめる？」

「……………いい、嫌じゃない」

「じゃあ見せて」

「わ、笑わないい…………？」

「笑わない」

頭を撫でながら桜介は諭すように言った。そう言い終わると、早速にスカート捲き上げる。スカートを捲き上げると、露になった刀奈の陰部には色素の薄い毛が控えめに生えていた。部屋の照明が当たると、光で透き通って見えるような薄さだ。

「ふっふっふ。可愛いじゃないの」

「ううっ！笑わないって約束したのに！」

刀奈は両手で真っ赤な顔を必死で隠そうとする。だがそれはやはり許されなかった。

「たっちゃん、スカートは自分で持ってる。酒持ってくるからさ」

「うう…っ！こんな時ばかりたっちゃんなんて…。普段言わないくせにっ…！」

赤面して顔を隠す女に、自分でスカートの裾を握らせてドSはテーブルから日本酒を持ってくる。

口では変態っ！変態っ！と言いながら指示にはきちんと従って腕を下げない女に、ドSはこっそりと口角を緩めた。

「うう…。ううう…。バカあ…」

「ほら、いい子だからこっち向いて」

スカートを捲き上げながら顔を背ける刀奈に優しく声をかけた。

トマトのように赤くなっている頬に手を添えて自分の方を向かせると、刀奈の羞恥に悶える様子をじつくりと堪能する。

「いや…っ。見ないで。変態、すけべっ」

間近まで顔を近づけると、刀奈が首筋に鼻をスリスリと擦りつけて甘えてくる。

「ふふふ、見るよ」

「や、やだっ。バカ、エッチ…っ」

子供のような悪口に、桜介は思わず笑ってしまいそうになった。ずっと聞いていてもよかったが、一通りそれに満足すると、アヒル座りの下半身へと酒を注いでいく。

「んんっ!? ひゃあっ!」

「ちゃんと足閉じてろ。途中で溢したら、最初からやり直しだ」

「そ、そんなに私をいじめて…っ! なにが楽しいのよ!」

刀奈は次々出されるに理不尽な要求に、だんだんと怒りが込み上げてきた。肩を震わせながら、相手をきつく睨みつける。

「お前が可愛いから悪い」

「うっ…。そんなの…：ずるい」

怒っていたはずなのに、そんな風に言われてしまうとそれだけでもうだめだった。ボソツと小さな声で、文句を呟くことしかできない。ストレートな言葉には簡単に嬉しくなってしまう。刀奈はもう反抗が出来なくなっていた。

「こんなもんかな…」

桜介は酒を注ぎ終わると、まずは引き締まった白い太ももを撫でながら、そこに軽くキスを落としていく。

「んっ…。んう…。あっ…!」

太ももにツ…っ舌を這わせていくと、刀奈はビクビクと体を震わせた。侵攻してくる舌に敏感な反応を見せる刀奈だが、酒は溢せないので身動きはとれない。太ももを内側にキュツと締めて、一滴も溢れないように一生懸命に耐えた。

「早くっ…。早く飲んでえ…!」

必死に懇願するが、それはあっさりと聞き流されて、太ももを手で唇で舌で、じっくりと可愛がられる。お願いを聞いてもらえないので、捲し上げていたスカートの上から桜介の頭を押さえた。しかしそ

の手は震えていて、たいした力が入っていない。それでは相手を止めることは出来ない。太ももの内側を酒と一緒にゆつくりと舐められていく。

「んっ……んんっ……はあ……！」

「ぶはあ。すげえ旨い。これは極上の酒だな」

「ば、バカ！は、早く、飲みなさいっ……！」

バカと言われても気にせず、桜介はちゆるちゆると音を立ててひたすらに酒を啜る。うまそうに、楽しそうに、豪快に、じつくりと味わうようになめ回していく。

「まあ、待て。慌てんぼうさん」

「くふう……もう許してえ……」

「ふう……。許せんな」

ジュルジュルと音をたてて啜る音が、余計に刀奈の羞恥心を煽っていた。刀奈はそれでも桜介の命令には従順だ。今まで散々そういうふうにしつけられた。反抗すると意地悪はさらにエスカレートする。それを知っている刀奈は、ただ健気に許しを乞うしかない。

「んう……んうう……！お願い、もう無理よ！」

「やれやれ、我が儘なメイドさんだ」

「わ、私にこんなこととして、お、覚えてなさいよ……！っ……！あうう……！ひっ、卑怯ものお……！」

完全に遊ばれている。それがわかって刀奈が反抗的な態度をとるが、ピチャピチャと股の中心を舐められると身体を跳ねさせてすぐに弱気な態度を見せた。それに満足した男が、嬉しそうに最後の一滴まで吸い尽くしていく。刀奈はもうそれを唇を噛み締めて声を押し殺し、頭を振ってひたすらに悶え続けるのみだ。

「はあっ……はあ……。お、終わったの？」

「あれ？……ここにまだ残ってるみたいだ」

「ああ……っ！それは違うの……！それはあ……！」

酒がなくなると、足を開かされて陰唇を舐められ始める。今度は漏れでる愛液を、じゆるじゆるとまた美味しそうに啜られていく。刀奈は快感に耐えられず、両足を閉じて太ももで頭を挟みこんだ。しかし

舐める舌も、吸い付く唇も、それぐらいでは止まらない。

「綺麗なピンク色だ。たっぷり味わないと」

「いやっ！バカ、だ、だめ！」

「刀奈はこっちもうまいなあ」

「あん、ああんっ…！美味しいわけないでしょお…そんなところ…っ！」

「うまいぞ？だから全部飲んでやる」

刀奈は懸命に頭を押さえるものの、手に力が入らず、挟んでる足もガクガク震えている。まともに抵抗出来ないのいいことに、舌で大車などころを好きなように蹂躪されていく。やがて陰核をツンツンと舌でつつかれると、刀奈は一際大きな嬌声をあげた。

「ごっ、好きだろ？」

「ああ…！し、知らない！こ、この酔っぱらい！あ、あ、だ、だめっ…！」

「ん？好きだろ？素直になれよ」

「ああん！っ、ツンツン、だめっ！そこ弱い…っ！はあっ…：知ってるくせに！」

「知らないよ？知るわけない」

男はとぼけたように言う。刀奈は陰核に吸いつかれながら、舌でツンツンつつかれて、両手で胸を揉まれている。そんなことをされたら、もう口で抵抗するしかなかった。

「う、嘘つき！あ…あなたが…そういうふうにはああ、したんでしょお！うう、そっ、そこ、ばっかり、いじつてえ…！」

「ごめんごめん。実は嘘だった」

メイド服の上から胸をもみもみと可愛がられる。刀奈の胸が収まるほどの大きな手。それに男を強く感じてしまい、興奮が高まって秘所からどんどんと愛液が溢れます。刀奈はもう、欲しくて欲しくてたまらない。

「わ、私をこんなにした、せ、責任とりなさい、責任をつ！」

「責任…てなんだ？」

「き、きちんと…：最後まで、しなさい…：」

簡単に言えば、抱いて欲しいというお願い。いつまでも遊んでばかりで、手を出してこない男に刀奈はしびれをきらしていた。

「ああ、やりたいのか。お前ってやっぱりエッチなんだなあ」

「お願い…もう我慢できないの…」

「また今度だ…」

「そんなこと言って、いつもしてくれないじゃない…。この、意気地無し…」

刀奈は瞳を潤ませて切なげにそう呟く。本当はとつくに身も心も全部奪われても構わないと思っていた。いや、自ら捧げたいと思うほどに、もう目の前の男に落ちていた。

それなのにいつまで経ってもどちらも受け取ってもらえない。もう我慢出来ずに自分からお願ひしても、それもさらつと流されてしまった。

それが寂しくて、切なくて、惨めでその目には涙がじんわりと滲んでいた。

「可愛い女だよ……お前は」

「…………お、女たらし」

太ももを撫でられながら、優しい口調でそう言われた。それだけでも、意思に反して嬉しい気持ちが出てきてしまう。それが悔しくて、刀奈はまた憎まれ口をたたいた。この男は明らかに女の扱いにも、こういうた行為に慣れている。いつだって涼しい顔で、弱点を的確についてくる。その手つきからも、舌使いからも、ぎこちなさなど微塵も感じさせなかった。桜介の女関係はろくに知らないし、聞いたことも思わない。それでも今までにそういう関係になった女が、いるかないかぐらいはわかる。振る舞いからそれを感じるたびに、刀奈は見たこともない女に嫉妬心を覚えた。自分は抱いてもらえないから余計に、それが燃えあがつてしまう。好きになつてからどんなに誘惑しても、アプローチしてもまるで靡かない桜介に、刀奈がそれまでになんとなく抱いていた根拠のない自信は、すでに粉々だった。それどころか今は、自分に魅力がないじゃないかとそれが不安で不安で仕方がない。

「……私じゃ、だめ？」

「違う！まじでそんなんじゃねえよ」

刀奈が涙声で力なく呟くと、桜介は起き上がってその体を抱きしめた。実際のところ、体をビクンビクンとさせながら一生懸命におねだりする刀奈が、可愛くてたまらない。今までもそういうことをされるたびに、全身がゾクゾクするのを感じていた。ただそれでも最後までしないのは、過去のことを今でも悔いているからだ。それ故に特別な女性などもう作るつもりもない。だからこそ刀奈に手を出すことには躊躇していた。そんなことはなにも知らず、たびたび理性を削つてくる刀奈に桜介も日々我慢をしていた。正直なところ、刀奈が意識してやっているような子供じみた誘惑はまるで効かないが、責められた時に天然で見せる反応がいちいち可愛くて仕方がないのだ。

「ううっ、ぐすっ……。じゃあなんで……」

そんなふう泣かれてしまっても、大切な刀奈を黙って抱きしめることしかできない。自分がひどい男だと自覚しながらも、思い出すのも嫌な苦い過去を、今さら誰かに話す気にはなれなかった。勝手なことを言うもんだと自分でも思いながら、腕の中ですすり泣く刀奈が少し落ち着くのを待って、やがてはつきりとした声で告げる。

「楯無、もうやめよう。こういうの」

突き放すようなその言葉に、腕の中で刀奈がビクンと反応する。肩をぶるぶると震わせてゆっくりと顔を上げると、真っ赤になった目で桜介を見つめた。

「な、なんで……？なんで急に……そんなこと！い、いやよ、いやっ！ちやんと言うこと聞くから……っ」

「なんでって……。ふざけすぎた。これ以上は洒落にならないだろ」

「わ、私は、最初から洒落じゃない！洒落でこんなことしない！それに刀奈……でしょ。ちゃんと刀奈って呼んで……っ」

安易な自分の言葉で、また俯いて泣き出してしまった刀奈を見て、正直困惑してしまう。

いじめて泣かすならともかく、悲しませて泣かせるつもりはなかった。ただそういう女心には疎いだけだった。

「刀奈…わかったから、泣くな」

「じゃあ…愛して。体だけでもいいから」

俯いたままだから顔は見えないが、絞り出すような声だった。別にそんなことを言わせたいわけじゃない。大切な女に、そんなこと出来るわけがないだろう。

「そんなこと…言うな」

「じゃあ…どうしたら、いいのよお…」

宥めるように言うと、刀奈は胸に頭を押し付けて、激しく首を横に振った。

しかしそんな風に言われても、桜介も本当にどうしたらいいのかわからなかった。でもこれは自分の軽率な行動が招いたことだろう。だから結局話せることだけは、素直に白状することにした。

「本当は俺も我慢してる。こんなことしてたら、いつかお前のことめちやくちやするぞ…」

「いいのっ。なんでも、していいよ…。だから、や、やめないで、ください」

「…あとで後悔するなよ」

そんなことを言われてしまったのは、もう本当は可愛くて可愛くて堪らない刀奈を愛でるしかなかった。もつともつと愛でようと陰核を指で摘まみ、舌でツンツンとつついていく。それだけであんなに欲しがっていた刀奈はすぐに悲鳴をあげた。

「ああっ！あああっ！」

「本当に甘えん坊だな、お前は…」

「ああ…！そ、そんなの全部、あ、あなたが悪いのよお」

「そうか、ほんとに本当に悪かった。ごめんね？」

「やつ、やあ、悪いと思ってるなくせにつ！ほんとに、憎たらしいんだからあ！あつ、ひいつ、そんなあ、そ、そんなに、吸わないでえ…！」

唇で陰核を挟まれたまま、舌でコロコロと転がされると刀奈はもう口でも抵抗をやめて快楽に身を委ねた。刀奈はただただ与えられる快感に身体を震わせる。すでに身も心も完全に屈服している刀奈が、それでももつつかかき憎まれ口を叩くのは、見知らぬ女への嫉妬から

だ。だがその嫉妬が、刀奈の情欲を余計に駆り立てていた。

「なんだ？もう降参？」

「ああ、気持ちいいのっ！桜介くん、もっと、もっとしてえ…」

「今のお前はメイドさんだ。ご主人様って言ってみろよ」

「くうう…う…！、ご、ご主人様。もっと、もっとしてください…っ」

「じゃあしてやる。こいよ」

もう刀奈は言われるがままに従う。この男の前ではプライドもすでに捨てていた。目を見れば心が見透かせるような相手に、もはや見せかけだけになったそれはなんの意味も持たない。しかし反抗すると喜ぶことを、刀奈はもう知っている。だからわざと反抗するようにしていた。しかしそれも長くは続かない。本心では好きなようにしてほしいと思っっているのだから。

「ああ…！恥ずかしい…っ！」

「平気平気。お前がこんなに甘えん坊だなんて、誰にも言わないから」  
「そ、そんなこと、言っちゃだめ…っ」

従順になった刀奈は、手を引かれておずおずと桜介の顔の上に腰をおろした。顔を跨ぐとボリユームのある尻肉を力強く鷲掴みにされ、舌を膣内に強引に侵入される。同時に親指で陰核を愛撫されると、刀奈から甘ったるい声が漏れた。

「あ、あん、いいよお」

「お漏らししたみたいになってる」

「んふう、ひいっ、言っちゃやだあ」

「随分と可愛い声出すね、刀奈は…」

「ん、ああんっ…！て、手繋いで…」

桜介は要望に応えて伸ばされた手を握る。そのまま舌で膣内をかき混ぜていくと、中から愛液がどんどんと溢れだしてくる。それを全部吸い上げる勢いで、音を立てて秘所にむしゃぶりついた。

「うめえ。もっとよこせ」

「あっ、ああっ…！もう好きにして…」

普段の勝ち気な刀奈からは考えられないような、媚びたような甘い声が室内に響く。気の強い刀奈もいいが、そういう刀奈も可愛げがあ

る。桜介は甘えるような声を聞きながら、どんと夢中になっていった。

「あっ…ああっ…あ…ん…ひゃんっ…」

「もういっちゃんいそうだろ?」

「う、うんっ、もう、いっちゃんのお、お願い…」

刀奈が甘えた声で懇願すると、陰核を細かく何度も甘噛みされる。刀奈はぶるぶる身体も声も震わせて、男の手をギュウツと強く握った。ひくつく秘所を男の顔に押し付けて、いやらしい鳴き声をあげて達していく。

「いっちゃん…あ…あ…あっ…!!」

限界に達すると、身体を痙攣させて大きくのけぞった。

「お前さ、わざと煽ってない?」

「はあ…はあ…。知ら…ない」

力が抜けた体をしっかりと抱きとめられると、刀奈は腕の中でわざとしらばっくれた。

## 4話

上海の桜介の友人宅の浴室。

広い浴室で刀奈は桜介の逞しい背中を泡で擦っていた。その男らしい背中に直接その手で泡を擦りつけていく。見れば見るほど引き締まった無駄のない肉体。全身が鋼のような筋肉に覆われていて、筋骨隆々としている。それなのに触ると柔らかくて弾力があり、しなやかにしなる肉体なのがよくわかる。こんな体に抱かれたら一体どうなってしまうんだろう。そんな生々しい想像をし始めて、刀奈の下腹部がキュンと疼く。

「抱いて。やっぱりあなたが欲しいの」

刀奈は気づいたら巻いていたバスタオルを外し、口からそんな言葉を漏らしていた。

本当はここでそんなことをいうつもりはなかった。

告白しようとしたら拒絶され、強引に中国までついて来てもう一度告白した。それで日本に帰ったらちゃんと言おうと、さつき約束してもらったばかりだ。

もう今までのようにわけもわからず、ただ断られているわけでもない。

それなのに、体を触っていたらうずうずして、つい抱かれるのを想像したら、欲しくなってしまった。

すでに刀奈の白い柔肌は朱が差して桜色に染まり、愛液が太ももの内側まで垂れていた。

「どうした？」

先程の発言はしっかり聞こえていたが、それでも桜介は問いかけた。

そしてなんの用だと言わんばかりに、視線を合わせる。要するにただの意地悪だった。

「う……。あのね、その……」

「なに？」

恥ずかしそうに俯く刀奈に、再度問いかける。

どうかしたんだろうか？そんなに言いにくいなら、無理に言わなくてもいいのに…。

「あの…えーと…だからね…」

「なんにもないなら、もうお湯で流したいんだけど」

もう充分擦ってもらったので、そろそろ背中を洗うのも終わりではないだろう。

別に手伝ってもらわなくても、最初から自分一人で洗えるのだから。

「く…ください…あなたのを…！」

「なにを？」

やっと切り出した刀奈に、間髪入れずに聞き返す。それだけではなんのことかわからないので、きちんと教えてもらわなければならぬ。

「やだっ。意地悪しないで！ねえ…ちようだい」

「だからなにを？」

「っ…！お、おちんちん…っ。あつ、あなたの…おちんちんをつ…！」  
顔を真っ赤にして、まるで男を誘うように身をくねらせる刀奈。その濡れそぼった秘所の具合を確かめるように、桜介はそおっと、なぞるように触れた。

「お前…エロすぎんだろ。それにもうこんなに濡れてる。なにもしてないのに」

「あ、あ、そうよ、ああつ…！だ、だって、今まで、ずっと我慢してたのお」

恥ずかしさがないわけではなかったが、もうそれどころではない刀奈は、言われたことをそのまま肯定する。撫でられただけで足をガクガクさせて、自分では立っていられず、豊満な胸を押し付けて相手にすり寄った。

「刀奈…。はしたないな、お前」

「そ、そうなのっ！あ、んう、はう、だ、だから…っ」

秘所を撫でられながら言葉で責められると、刀奈は切なげな吐息を漏らし、男の体にしがみつく。

それでも相手は表情を全く変えずに、すぐに次の質問をしてきた。  
「だから？」

「あ、ああん、だ、だからあ……！」

「だめだな。そんなに求められて、正直悪い気はしないが今はお前を抱けない」

男は軽く首を振りながら、ご希望には応えられないことを淡々と伝える。

しかしすでに涙を浮かべて精一杯悶えている刀奈は、それを簡単に受け入れることなど出来ない。

「や、これ以上焦らさないで……！もうおあずけはいやよ、お願い……っ」

「そんなこと言われてもな。明日、足腰が立たなくなっても困るだろ。今はこれで許せ……刀奈」

「ん……っ！」

桜介は少し身を屈めて後頭部に片手を回すと、そっと触れるだけのキスをしてすぐに唇を離れた。

「き、キスしちやっ……まさかあなたから……してくれるなんて……」

「柔らかいな、お前の唇」

「うううっ……」

突然された初めてのキス。数瞬すると徐々に実感が湧いてきて、瞳からじんわりと涙が溢れる。

今までからかうはずがからかわれて。散々恥ずかしいことも言わされて、させられて。

しかし口にキスはしていない。例え刀奈がしたいと思っても、嫌がられるのが怖くてとても自分からは出来なかった。

「また泣くのかよ……。なにも泣くことないだろ」

「な、泣くでしょ、今までのことを思えば……」

「悪かったって言っただろう？」

「いや、もう一度してくれないといやっ」

桜介は駄々をこねる幼子のように甘えてくる刀奈を抱き寄せると、火照った頬に両手を添えてもう一度キスをする。刀奈は唇が触れる

と背中に両手を回して、離さないというように強く抱きつき、唇が離れると名残惜しそうに瞳を潤ませて桜介を見つめた。

「んっ…。もう終わり？もつと、もつとして」

「きりがないな」

「だめ…。まだ許してあげない…っ」

刀奈は瞳をトロンとさせて相手を見つめた。身長差のある二人だ。刀奈は必然的に相手を見上げる形になる。ずっとしたかったキスだ。もつともつとしたい。上目遣いでキスをねだるようにすり寄られると、桜介の男根がピクンと動いた。

「ひゃっ!?う、動いた…」

「生理現象だっつて」

「そ、そう、そうだよね。あ、あのね、よかつたら、その、私が…してあげる…っ」

「処女のくせに…。お前って奥手なんだか、積極的なんだか、もうわからないよね」

「自分ばかり慣れてるからっつて。バカにしてっ!」

バカにしてないだろ、と呟きながら桜介が浴室の椅子に腰かけると、刀奈は床にバスタオルを敷いてその上に跪いた。そして男根をジーツと見つめて、ごくんっつと生唾を飲み込む。

初めてまじまじと見た男根は力強く反り返っていて、もうすでに剛槍と化している。それを桜介がふざけてピクンピクンと動かすたびに刀奈が驚いて、ひゃっ!?!と声をあげた。

「そ、想像してたより、大きい…」

「…：…想像してるなよ、バカ」

素直な感想を漏らされて、一応突っ込んでみたものの、せつかくのご厚意だ。桜介はとりあえずは好きにさせてみることにした。

刀奈はおそろおそろ男根を握ると、拙い動きで上下にしごきあげていく。

顔を真っ赤にさせて一生懸命に手を動かす刀奈を見て、男根がさらに大きくなる。刀奈が先端にチュッと口づけると男根はピクンと跳ねた。刀奈はそれを確認して、さらに続けて口付けを落としながら、



「き、聞かなくていいから!」

じつーと見られると、ごまかすように視線を逸らす刀奈。桜介は後ろから刀奈のひざの後ろに手を回して両足を開かせると、そのまま持ち上げて鏡の前に座らせた。

刀奈は意図がわからずに、不思議そうに後ろを振り返る。

「ほら、次は自分でしてみろよ」

「な、なにを?」

困惑する刀奈に、思いもよらない言葉が投げられる。

「よくやってるからわかるだろう。いつも俺が寝てると思って…」

「つゝゝゝ!?!」

おもいきり心当たりのあるカミングアウトに、刀奈は急激にその顔を赤くする。だから余計に面白がって話を続けた。

「夜中に布団の中で……」

「や、やめて、言わないで!」

「勝手に人の名前まで口に出して……」

「だめ、だめ、だめっ!」

「いかがわしい声をあげて……」

「お、お願い、お願いします……っ!」

完全に狼狽え出した刀奈は、慌てて目の前の口を塞いだ。まさか、まさか、ばれているなんて。そう思いながら、刀奈は赤面する。桜介が寝静まったのを確認してから、一人で慰めていた。それも頻繁に。自分から誘惑してはやり返され、好きなように弄ばれて、そのまま放置されて、たまらなくなつて…。その放置した男のことを考えながら自分でいじっていた。それをよりにもよつてその相手に全部ばれていた。刀奈は恥ずかしすぎて、また泣き出しそうになつてしまう。

「うゝゝゝ! やだあ!」

「じゃあさ、いつも通りにやってみよう」

「いや、だめ、やだ!」

桜介はもう完全に楽しんでた。自分の押しに弱いのはもうとつとくにわかっている。口を塞いでいる手をどかすと、バタバタ暴れる刀奈の両足を掴んでぱっくりと開く。それから後ろに座つて耳元で囁

いた。

「なんだ、こう言った方がいいのか？」

「えっ…？」

「やれ」

「は、はい…」

命令口調で言われると、刀奈は俯きながらも小さく返事をした。こんなに力強い瞳でまっすぐに見据えられて、断れる女なんているんだろうか、そう思いながら素直に従った。後ろから足を抱えられたまま、言われるがままに自慰を開始する。俯いたまま、自分の秘所を中指で擦っていく。自らの指が陰核に触れると熱い吐息がもれるが、唇を噛み締めて声を漏らすのは耐えていた。

「んっ…んん…ふうん…はあっ…あ、ああん…」

豊かな胸を後ろから揉まれると、刀奈の口から嬌声が漏れる。桜介はぐにぐにと胸を揉みしだきながら、すっかりピンク色に染まった首筋に唇を落とすと、背中にも舌を這わせた。

「ああっ…。当たってるう…。またおっきいのが…」

「あんまり可愛い声出すからだろ。前向いて鏡見ろ。お前の可愛い顔がよく見えない」

「あっ…。う、あ、う、ああっ…！いやあ…」

いやいやと首を振りながら、刀奈は鏡の中の自分を見た。後ろから首筋に吸い付かれて両手で胸を揉みしだかれ、自分の指で陰核をまさぐりながら、快樂に顔を歪めて、口からだらしなくよだれを垂らす自分自身を。なんていやらしいんだろう。今まで見たことがない淫靡な自分の姿に、奥の方から熱いものが際限なく溢れでてくる。

「いつもこんな顔してるんだ、お前は」

「違う…っ！そんなこと……ない…っ…」

「ふ。あるんだよ、自分からねだるような手元いやらしい女だろ？お前は」

「あああっ……い、言わないで…」

刀奈の否定の言葉は鼻で笑われる。笑われた刀奈は羞恥心からもっと乱れていく。もう足は掴まれていないのに、濡れそぼった秘所

を見せつけるように自ら足を開いて、後ろにすぎるような視線を向ける。刀奈が振り返ると桜介は涼しい顔で微笑んだ。こんなに恥ずかしいことをさせておいて、飄々と上から見下ろす桜介に刀奈は反抗心ではなく、愛しさを覚える。自分を可愛がってくれる愛しい男にもう抵抗する気は起きなかった。随分前からこの男の前では、更識家の楯無ではなくただの刀奈だ。そして今はただのはしたなく欲情した女だった。

「んっ…。桜介くんキス…して。い、いっぱいして…！」

指を動かしたまま体を震わせて自らキスをねだる。顔を近づけられると刀奈は自分から唇を合わせた。自分から舌を入れて夢中で桜介の舌を追いかけてなめ回すが、固くなっている乳首を摘ままれてこねられると、刀奈は口を開けてせわしなく動いていた舌はその動きを緩めた。

「あ、ん、ちゅっ、やだ、こ、コリコリしちやだめ」

「いやだったか。じゃあやめよう」

「あ、そんな、や、やめないで」

「嘘をつくような女にはお仕置きが必要だな」

そう耳元で囁かれると刀奈はゾクゾクと身を震わせた。続けて、だから早くいっちなまえ。乳首をキュツと摘ままれてそう言われると、全身にビリビリと甘い痺れが走ってすぐに達してしまう。刀奈はやだやだなんて言いながら、頭の中は既に、お仕置きのことでいっぱいだった。

## 5話

桜介の友人宅の広い浴室、刀奈はそこでお仕置きを受けていた。刀奈はいったばかりの敏感な秘所に、シャワーを押し当てられて足をガクガク震わせている。

もう自分では立っていられない刀奈は、何度もしゃがみ込もうとするが、シャワーを持っていない方の手を腰に回されていてはそれも叶わない。

「ああっ…許して…！こんなの、おかしくなっちゃうう…っ！」

「許すも許さないもないだろ…。あんまりびしょびしょに汚すから、洗ってあげてるのに」

「くふう…！いいの、自分で洗うからいいのっ！だ、大丈夫、大丈夫だから…！」

刀奈は強すぎる刺激に体を震わせて、必死に説得しようとする。片手で抱かれて動きを制限されている刀奈は、身動きがとれずにもうそうすることしか出来なかった。

片手を男の背中に回して強く抱きつき、もう片方の手は男のシャワーを握る腕を握っていた。

「遠慮すんなって」

「してない、してない…からあ！だ、だめ、だめよ、こんなのお…」

「確かにこのシャワーはだめだな、勢いが弱すぎて。せつかく大好きなお仕置きなのに」

もともと会話が噛み合わないことには定評のある男だ。しかも今はわざと噛み合わせていない。

刀奈はシャワーを握る手をなんとかしようと思えば腕を引っ張るが、男の逞しい腕はそれぐらいではピクリとも動かない。腰を引こうにもそこはしっかりとロックされている。もう足に力が入らず、シャワーを挟むことも出来なくなっていた。

「ば、ばかあ！あ、いや、お仕置きなんてえ…もう嫌いっ、嫌いよお…んう…ん…！」

「お前が嘘などつくからだ」

「もうっ、しない、す、素直になるわ、あ、あ、ああ…！もう、もお、嘘つかないっ…」

抵抗を諦めた刀奈は、弱音を漏らし、胸板に頭をグリグリ擦り付け、快感に耐える。

困るとそうやって、すぐに甘えた仕草を見せるのが男をさらに煽っていることを、刀奈はまだよくわかっていない。

「それよりさ、いつもの余裕ぶったお姉さんキャラはどうした？俺のこと可愛がってくれよ」

「っ…！…そんなっ…！んんっ…そんなの…出来るわけないでしょお…っ」

無意識のうちに煽られた男は、シャワーの位置を細かく調整しながら意地悪に問いかける。腰砕けになりながら身動きがとれないで悶えている刀奈を、もっと困らせようとさらに煽る。

「なんだ？強いんじゃないのか、おねえさんは。弱々だな…これじゃ」

「は、反則…っ、反則よお…！…こんなの。ど、道具を使うなんてえ…！」  
「また言い訳か、どうしようもないおねえさんだ」

もっと反抗しろと言っている、刀奈はそう感じた。実際桜介はどちらかと言えば、気の強い女性の方が好みだ。それは刀奈も知っている。従順なだけの女には興味を示さないのも知っていた。実際自分はそんな女じゃないが、散々そうなるようにしつけておいて、完全に身動きをとれなくしておいて、悪びれもせずにそんなことを言う。相変わらずなんて勝手な男だろうか、そう思ったらすっかり従順になっていた刀奈の中にも、だんだんと反抗心が芽生えてくる。

「こ、こんなこととして、許さないんだからっ！あ、あうん、あああ…っ！」

「どう許さない？」

「あっ…！わ、私が…や、やあっ…お仕置きしてあげるのよお…」

「それは楽しみだ」

刀奈は形だけの反抗を始めると、お腹に当たっていた男根がピクンと跳ねた。そして膨張したそれをお腹にゴリゴリと押し当てられた。

この男は気の強い女を屈服させるのを好む性癖を持つ、根っからのサディストだ。男が喜んでるのがわかって、刀奈はさらに口だけの反抗を続けた。

「桜介くんを、たっぷり、焦らしてっ、あ、あげるんだから…っ」  
「それでどうする？」

男がにこりと笑いながら問いかける。反抗しながらも弱々しく自分の腕を握っている手はまだ震えていて、そういうところは本当に可愛いげがある。

「か、かたな…の中に入れてたいって…あ、あなたから…言わせるの！」  
「刀奈の、なんだ？ちゃんと見えよ」

「うう、かたなの、お、おまんこ…っ、です」

真つ赤な顔で眉を釣り上げて睨んでくるくせに、そんなことを言うなんて、この子はもう欲しくて欲しくてたまらないだろう。あまりに可愛い反抗に、桜介は嬉しそうに笑うと瑞々しい唇に口づけた。ディープに舌を絡めて口内を好き放題に舐め回していく。すると刀奈が拙い舌使いでそれに応えてくれる。ねじ込まれた舌を押し返すように、一生懸命に舌を合わせてくるのが余計に堪らなかった。だからシャワーを刀奈の秘所に押し当てたまま、激しいキスを続けていく。

「んんー！んう！んふう！」

「可愛いな、お前。もうシャワーはいいだろ」

そうやって桜介はシャワー置くと、少ししゃがんで秘所に剛槍と化したそれを擦り始めた。いわゆる立ち素股のような格好だ。刀奈の柔かい尻に指を食い込ませてしつかり掴むと腰を自由に動かし始める。

「はあん、だ、だめ！もういつちやいそ…っ」

「それはいいが、少し早い。我慢しろ」

「は、激しくしないで、ゆっくり、ゆっくりしてっ！」

荒々しく剛槍を擦り付けられた刀奈は、普段の強気な瞳を潤ませて懇願するが、もうそんなこと出来るわけがない。甘えた声でそう言われるのは、男にとっては逆効果だ。

「それは無理だ。お前が興奮させるから悪い」

「そんなの、し、知らない。や、いっちゃう…っ」

胸板に押し当てられている豊満な乳房も、ガクガク震えている足も、必死に首にしがみついてくる腕も、責められて不安げに揺れる瞳も、甘えると幼くなる言葉使いも、刀奈の全てが男を興奮させる。男の腰の動きが早まると刀奈はすぐに達してしまいが、それでも男は止まらなかった。

「も、もう、だめ！う、動かないでっ…！」

「頑張ってください、としか言いようがない」

「ば、ばかあ！ふ、ふぎけないで…！」

口調はふざけているが、男は全くふざけていない。グチュグチュと音を立てながら、刀奈のムツチリした太ももと、愛液が溢れた滑りのいい秘所の間を剛槍が行ったり来たりしていく。浴室に響く刀奈の悲鳴が余計に男を高ぶらせた。

「ああああっ！もう、もう許して、お願いよお…！」

「もう少しだけ頑張れるだろ」

「ああ〜っ！むりい、もうむりなのお！」

そんなことを言いながら腰を動かし始めた刀奈に、男は口角を緩める。とろけきった顔と、溢れだしてくる愛液、口から垂れているヨダレが、刀奈の興奮を教えてくれる。

「無理じゃないだろ。腰が動いてるぞ」

「ち、違うっ！これはあ…違うの…そんなこと…しないんだからあ。

ああ…気持ちいい…っ」

「やっぱり違くないだろ。もつとしたいんだろ？言ってみろ」

「そ、そうなの…！も、もつと…したいのっ！はうん、あ、あ、激しい

よお…！」

刀奈は男根が行き来するたびに、悩ましい声をあげて鳴き続ける。それでも甘えるように自分から腰を押し付けてくる刀奈が、愛おしくて仕方がない。桜介は激しい連続突きを繰り返して刀奈を何度もイかせると、やがて自分も精を吐き出した。

## 6話

中国から帰国した翌月のある日。

寮の自室で制服姿の刀奈は、ソファの上に座る桜介の上に股がる格好で向き合っていた。

「ねえ、最初は私にリードさせてくれるかしら」

「ああ、お前の好きなように、やってみるといい」

その返事をもらって安心した刀奈は、相手の頬に手を添えて自分からキスをする。

始めは短いキスを、途中からは舌を絡めた濃厚なキスを何度も何度も落としていく。そして、最後に下唇を挟むようについばむ。

「ふう…。今日は随分と積極的なんだな」

「ん…っ。いつもあなたの好きなようにされてるでしょう。でも私だって、あなたを満足させてあげたいの」

すっかり頬を上気させた刀奈が、男の上着に手を伸ばしてそれを一枚ずつ脱がせていく。

男としては今まで自分に従順になるように、きちんとしてきたつもりだった。

だがどうやらこの女は、いまだに自分が主導権を握りたい気持ちが心のどこかにあるようだ。

「あ…い…んちゅ…っ！…んふう…」

ストッキング越しに尻肉を掴まれて、男の上半身に口づけをしている刀奈がピクンと反応をする。

これだけ敏感な反応を見せてくれるなら、今まで散々焦らしてきた甲斐もあったのかもしれない。

やわやわと柔らかな尻を揉みしだしている間も、刀奈は男を満足させようと、一生懸命に上半身へと舌を這わせていく。

「ちゃ、ちゃんと、見てて、ね」

やがて刀奈は声をかけてから立ち上がり、自ら履いているストッキングを脱ぐ。

次に赤く染まった顔でチラッと男の方を見てから、パンツもゆつく

りと下におろしていく。

「本当にお前はエッチだねえ」

「それは、あなたの、せいでしょう…」

もともとはどこかミステリアスな雰囲気を持つ女が、今はなんとか興奮してもらおうと、いやらしく見せつけるように脱いでいく。

しつかり男の視線を意識したその様は、まるで場末の劇場ストリツパ―のようだ。

とても育ちのいいお嬢様のやることではないが、こんなもの見せられて滾らないわけがない。

「もう、おつきくなってる…」

男にはソファに横になってもらって、刀奈が両手でボクサーパンツをずらしていく。

その言葉の通り、男根はすでに猛々しく、カチカチにそそり立っていた。

「うふふ、おねえさんが可愛がってあげる」

刀奈はその言葉とは裏腹に、頬を染めて照れくさそうに笑い、それをそのまま口に咥える。

そして顔を上下にゆっくりとストロークさせる。

いつもよりも奥まで咥えこんで強く吸い付く、それはいわゆるディープスロート。

「どほっ…きもひいいひよっ？」

「うん、いいねえ。本当に上手になった」

楽しそうだなによりだと思しながら、桜介はただそれに身を任せていた。

今までたっぷりと焦らされてきた女が、今日は自分を楽しませようと、自ら頑張ってくれている。その状況をおもいきり楽しんでいた。

「もう、いいわね…」

やがて男根から口から離すと、刀奈はもぞもぞと恥ずかしそうに上に股がり、それから瞳を潤ませて喉をぐくんと鳴らす。

「ああ、あんまりもったいぶんなよ」

少し困らせてやろうと、ここであえてせかした。すると案の定、困

惑の表情を浮かべる刀奈。

その瞳には期待が半分、不安が半分だろうか。初めての行為だ。それも無理はないのだろう。そんなことを思いながら、桜介は上に股がる刀奈をじつと見つめていた。

「じゃ、じゃあ…」

「そろそろいただこうか。お前の初めてを」

言葉を途中で遮って、わざわざそんな意地悪を言ってやることにした。

「っ…！」

それで予想通りボン！と赤面する刀奈に、顔がにやけそうになる。「き、気持ちよく、なってね」

刀奈は戸惑いながらも、ボソツとそう言った。

ここまで気丈に振る舞っていたが、その声は少し震えている。それでも自ら大きくした立派な男根を、しっかりと握ってその上に一気に腰を下ろす。

「っっ…！」

膣内はすでに十分に濡れているため、途中までズリユツと滑らかに入く。しかしやはり途中で何かを貫かれたようなそんな感触がした。

「大丈夫？」

その様子を眺めていた桜介が心配そうに声をかけた。女の初めてを奪うのはこれが最初ではなかったが、この感触は簡単に慣れるものでもない。

「はっ、はああ…！だ、大丈夫っ！平気よ、これぐらい…っ」

刀奈はそんな風に強がりを言うが、顔を苦痛に歪めており、瞳からは涙を流し、破瓜の痛みに耐えるように唇を噛みしめている。

それでもこの女は大丈夫だと言っている、それならここでやめたりするのは優しさではなく、逆に女に恥を搔かせることになるだろう。だから桜介は言われた言葉を、そのまま受け取ることにした。

「ああ…！嬉しい…っ。やっつと、やっつと…あなたのものに…なれたっ」

愛しい女に涙を流しながらそんなことを言われて、嬉しくないはずがない。

また桜介がそれにすぐ興奮したとしても、なにもおかしくはなかった。

「刀奈…。無理しないで自分のペースで、ゆっくりと動けばいい」

まだなにも動かしていなくても、温かな膣肉が男根をギュウギュウと締め付けてくる。

正直言つてたまらなかったが、まさか処女膜が破れたばかりの女を、下からおもいきり突き上げるわけにもいかないだろう。

それにそれはあとでいくらでも、それこそ好きだけ出来ることなので、今は刀奈の拙い腰使いをただ楽しむことにした。

「ああつ、好き、大好きよ…っ」

刀奈が必死に腰を動かしながら、とろけた瞳ですつとこっちを見つめてくる。

ああ、これはヤバイな、男はそう思いながら下からじつくりとそれを眺めていた。

「ね、ねえ、き、気持ちいい？」

しばらくにも言わないで眺めていると、刀奈が不安そうに聞いてくる。

そんなの気持ちいいに決まっていたが、そろそろもう少し早く動いて欲しかったので、ちよつとだけ意地悪なことを言ってみる。

「そうだね。でもこれじゃ満足はな」

「じゃ、じゃあ、もっと頑張るわよ…っ」

もう自分の前ではそうでもないが、もともとは負けん気の強い女だ。

煽るように言えばきつとそういう反応をすることは、すでにわかってきっていた。

実際にそれで刀奈の腰の動きが早くなり、最初は息苦しそうだった呼吸は、途中から熱い吐息へと変わった。

「ひいん…いや、動いちゃだめよお…！」

やがて嬌声を漏らし始めたので、少し腰を浮かせてみると、思った以上にいい反応をしてくれる。

どうやら刺さる角度が変わったことで、刀奈の気持ちがいいところ

に当たるようだ。

「そんなこと言わないでさ、頑張って」

「む、無理……！もう、頑張ってるの……っ」

「そうなのかく。じゃあさ、ここからは俺がリードしてあげようか？」  
笑顔を浮かべてそう言うと、刀奈は植え付けられた被虐心が疼いて、ぶるりと体を震わせた。

きつとそれだけでわかってしまったんだろう。

このままならそろそろ下からおもいきり突き上げるぞと、暗にそう言われていることが。

「わ、私が、私がちゃんとするから……っ」

ただでさえもうすごく感じているのに、めちやくちやにされてしま  
うのがわかって、刀奈は弱々しい声でそう答えるしかなかった。

「ひんっ！あああ……！もう、もう……！」

男が腰を浮かせたことで、腰を上下させることに膣内の気持ちがい  
い部分に男根が当たる。

そんなの今日が初めての行為で、刀奈がいつまでも耐えられるはず  
がなかった。

「あ、ああ……！う、動かないって言ったのにつ……だめよ、だめっ、や、  
そんな……っ！」

確かにリードさせてあげるとは言ったが、別に動かないとは言つて  
いない。

「乗るのは得意だろ。俺を操縦してみろよ」

だからそろそろ自分から動いて、軽く突き上げてみることにした。  
「ば、バカ……。意地悪う……。ひっ、や、やだあ、やだやだっ、ひい、だ  
めえ……！！」

刀奈があんまり必死なので、どこかおかしくなって笑ってしまいな  
がらも、突き上げる力を少しづつ少しづつ増していく。

力強く突き上げながら上を眺めると、瞳に涙を浮かべた刀奈が首を  
激しく横に振っていた。

「刀奈……愛してる」

射精感の代わりに愛しさが込み上げて、一言でシンプルに愛を告げ

る。

「わっ、私もお……！」

返事をもらって、そのままおもいきり突き上げる。すると刀奈は悲鳴のような嬌声をあげて達してしまい、力が抜けたように男の体になだれかかった。

## 7話

騎乗位で達してしまった刀奈は上半身を預けて男の胸にしなだれかかると、うっとりとした表情で一度男の顔を覗き込み、その余韻に浸るように目をつぶった。

「ベツトにいいこうぜ。まだ終わっちゃいない。俺を満足させてくれるんだろ？」

少しぐったりしている様子の刀奈に、男は当たり前のようにそう言った。

実際にまだ一度も果てていない男根は、今も刀奈の膣内でピンピンにいきり立っている。

これは男にとつても久しぶりの行為、こんなところで終わらせられるはずがない。

「う、うそ…っ、待って…」

「嘘じゃないし、待たない。このまま移動するから、しっかり掴まってる」

男は刀奈が首に抱きついたのを確認して、挿入したままその場に立ち上がる。

刀奈は両足を腰に回してしがみついたが、男の剛槍はしっかりと奥に届いていた。

「んうっ!?だ、抱っこっ！ちゃんと、ちゃんと抱っこしてええ!!」

歩き出した男は下から軽く支えているだけで、刀奈の体をきちんと持ち上げていない。

一歩歩くたびにその振動で、押し当てられた剛槍が降りてきた子宮口をコンコンとノックする。

「ひぐうーだ、だめっ、こっ、こんなの！おっ、お願いっ、抱っこお!!」  
先ほどまでの年上ぶって主導権を握ろうとした女はもうどこにもいない。

少し前屈みになって顔をのぞきこめば、刀奈は甘えるように鼻と鼻を擦り合わせてくる。そして瞳に涙を滲ませながら文字どおり泣きついてきた。

「そんなに抱っこがいいのかな?」

「うんっ、そうなの、抱っこしてほしいのっ」

ここに居るのは男にとってはいつもの、いつも通りの、年上としての意地など全部捨て、夢中でただひたすらに甘えてくる刀奈だ。

「まったくう。お姉さんのこんなところ、とても妹には見せられないな」

「やっ! そんなこと、言っちゃやだあ!」

今さらながらに羞恥心が煽られたんだろうか。妹の話をした途端、その顔は真っ赤に染まり、滾る男根が膣肉でキュツと強く締め付けられる。

「ふ…。お前はさ、やっぱり可愛げあるよ」

誉めると同時に軽く支えていた両手も離して、根本までしつかり突き刺す。

「ああああっ!?! いっ、いじめないでっ!」

「いじめてない。むしろ、これはご褒美だ」

その反応があんまり可愛いので、一度持ち上げてまた突き刺した。

「ひ…っ! じゃ、じゃあ、抱っこをつ…!」

「大丈夫、もうついた」

最後まで抱っこをせがむ刀奈をようやくベッドにおろして、男根を一度引き抜く。

そのまま制服を脱がせて寝かせると、刀奈は自分から膝を立てて足をゆっくりと開いた。

恥ずかしそうに目を逸らしてはいるが、どうやら刀奈も本当はまだまだ乗り気なようだ。

その証拠に膣口からは、まるでよだれのように、はしたなく愛液を垂らしていた。

そこに剛槍の先端を当てて上から見下ろすと、刀奈が媚びたような目つきで不安げに呟いた。

「うう、や、やさしく、して?」

「約束は出来ないが、努力しよう」

その言葉通りに、狭い膣内の肉壁をかき分けてゆっくりと挿入し、

一番奥までいくと抜けそうになるギリギリまで引く。

動かたばに温い膣肉が柔らかく絡み付いてきて、それだけでも充分に気持ちがいい。

刀奈はこんなところまで柔らかいのかと、これにはさすがに感心してしまう。

「あ、い、いい…き、きもちいつ、桜介くん、大好きい…」

まだ行為に慣れていない刀奈には、これぐらいの刺激がちょうどいいんだろう。

男根をゆつくりと動かしていくと、しだいに顔をとりけさせて甘い声を漏らし始めた。

「こんなんじや、こっちがとろけちまう」

溶けそうな程にトロトロになった秘所の最奥に、グリグリと押し付けながら耳元で囁く。

それだけで刀奈は快感にぶるぶると体を震わせた。

「あう、そ、それっ、だめ…！」

「それって…？」

「あん、まり、グリグリ、しないでえ…」

上半身が密着すると、刀奈がすぐに背中に腕を回して甘える猫のように体をすり寄せてくる。

それでもさらにゴリゴリ押し当てながら、頬や首筋にまるでマーキングするようにキスを落とす。

「これ嫌い？」

「あ、あうん、き、嫌いじゃないの、で、でもお…、感じちゃうう…」  
もう完全に甘えモードの刀奈が回した腕にギュツと力を込めてくる。

自分だけに見せてくるその姿はとても可愛らしいものだが、このままじゃいつまで経っても満足は出来そうにない。

「もうそろそろいいよな。ここからは俺の好きにさせてくれ」

熱のこもった眼差しで、こんな風にはつきりと言われてしまえば刀奈はもうなにも言えない。

心の中ではずっとこの人の好きなようにされたいと思っていたの

だから。

今まで求めても求めても、時には窘められ、さらりとかわされ、最後には拒絶されてきた。

そんな男が今は自分を求めてくれている。

自分を好きにしたいとそう言っている。

嬉しくて嬉しくてまた涙が出そうになる。

もう刀奈がその感情に抗えるはずもなかった。

「どうぞ、あなたの、お好きなように……っ」

## 8話

「どうぞ、あなたの、お好きなように…っ」

困ったように眉は下がり、瞳を潤ませていたが、しつかりとした意思の感じられる声色だった。

その言葉を聞いて、密着していた上半身を離し、腰を強めに打ち付ける。

「あん…、あん…っ、あんっ！」

桜介は今までよりも強く、そして速く、何度も何度も固い肉棒を打ち付けた。

「ああ…いやだ、だめ、そんな…！」

後ろ手で枕をぎゅうつと掴んで、刀奈はただその与えられる刺激に耐える。

口では反対の言葉を言おうとも、こうなると刀奈の態度はとにかく従順だ。

しだいにピストンが速められると、きちんと調教されている刀奈は、男の腰に足を回してされるがままにそれを受け入れる。

「いい子だ」

「う、うん…。もっと、いい子にする…っ。だからいっぱい、可愛がって？」

「いいや、お前は最初からいい子だよ」

普段の奔放な振る舞いからは、想像もつかないぐらいに実は色々と尽くす女だ。

今も自分を喜ばせようと、泣きそうな顔をしながら必死で腰を振っている。

そんな女に今さら遠慮などいらないだろう。

なによりこの女がそんなこと望んでいない。

「そしていい女だよ…」

初めての男を受け入れたばかりの膣内はキツキツで、体を鍛えているからなのか、想像以上に締まりもいい。

それに早く精を搾りとうとうと、まるで膣肉がいやらしく絡み付いて

くるようだ。

そこを時には激しく、時には緩やかに、緩急をつけて気の赴くまま、やりたいように責め立てる。

「ね、ねえ……桜介くん……」

責められている刀奈が甘えた声を出して、すごく物欲しそうな顔でじっと見つめてくる。

この顔はいつもキスをねだる時の顔だった。

一目見てそれに気づいた男は再び体を密着させて、端からだらしなくよだれを垂らしている、その半開きの口に舌を挿入する。

「んっ……。んう、んふう……」

その途端に刀奈が夢中で舌を絡めてくる。

唾液をいっぱいに含んだその味は、男をとろけさせるような甘さを感じさせて、すっかり嵌まってしまいそうだった。

「あああっ……！もお、いっちゃいそっ」

舌を絡ませながら腰の動きを止めずに突き続け、男がしばらく快楽を楽しんでいると、先に刀奈の高ぶりが限界に達してしまう。

正しい背中を強く抱きしめながら、切なげな声を漏らして懸命にお願いをする。

「ぎゅって……して」

もちろん男としては、その可愛いお願いを聞いてやらない理由などなにもない。

抱きしめる腕に力を入れてさらに剛槍を突き立てると、刀奈は膣をヒクヒクと痙攣させ、最後にいつもより高い声をあげた。

「あ、あ、まだあ……？」

「いいんだろ」

「いいけどっ、いいけどお……」

桜介はまだ痙攣している膣内を、遠慮なしにやりたい放題突いていく。

先程のとろけるようなキスの甘さで完全にスイッチが入っていた。あまりに美味しくて、その味に浸っていたと言ってもいいだろう。そんな風になってしまえば、もうここで呑気に休憩など出来るはず

がない。

全身でもっと味わいたいのだ、刀奈の味を。

「だめ、だめ、だめえ……！」

他の人間や大勢の前では、凜としていて伶俐な表情もよく見せている。

またはいつも余裕たつぷりに、人をからかうイタズラっぽいお姉さんという感じだろう。

そんな刀奈が今は一突きするたびに、その整った端正な顔立ちを快感で歪め、涙を流しながら悲鳴のような嬌声をあげている。

そんなのよほどのMでもなければ、誰だって興奮するに決まっている。

そしてこの男は正真正銘のドS、もう楽しくて楽しくて仕方がない。

「もう、生意気言わない……っ、だから許してっ」

むしろ少しは反抗されるのも楽しいから、もっと言ってくれても全然構わない。

すでにスイッチが入ってしまったているドSの男が、そう考えるのはごく自然のこと。

だから桜介はもっとピストンを速めて、たくさん可愛がってやることにした。

「ひあっ、やあ、やっ、激しいのっ！」

「体力には自信があるだろ」

「そんなの、あなたと、勝負になんて、なるわけ、ないでしょお……っ」  
それはすごく最もご意見だが、そんなクレームは現在受け付けていなかった。

刀奈の腕の何倍もあるような太い腕を、力一杯掴まれて思い切り爪も立てられるが、そんな可愛い抵抗など、この男にとつては痛くも痒くもない。

「もう、私、だめなのっ、わ、わかるでしょ」

そんなことは涙でぐちゃぐちゃになったその顔を見れば、言われなくても簡単にわかる。

しかしそれがどうしたというのだろうか。

「もう俺のものなんだろう?」

「そ、そうよ、全部、全部あなたのっ!」

それなら何の問題もないはず、だがやはり健気な女にはご褒美をあげたくなるもの。

だから刀奈の一番感じる最奥を、細かいピストンで集中的に突いてやることにした。

「くうっ、くうんっ、く、くふう、くうう…!」

「おっ、いい声で鳴くじゃない」

「う、ううっ、ううう! た…助けてえ…」

焦点の合っていない虚ろな目ですすり泣くが、誰も助けになどくるはずもない。

いつも困った時に助けてくれる頼りになる男は、今刀奈を責めるのに夢中なのだから。

先程までの行為が愛し合う男女の愛の営みだとするならば、これは完全に屈服した雌を絶対的強者の雄が好き放題に蹂躪する、そんな行為だった。

「ふう〜。気持ちいいか?俺は相当いいよ。実はずっと我慢していたんだ」

「なんでえ…?!我慢なんて、しないでえ…。もう、出してっ、お願いよお…」

ここでようやくやくのカミングアウトへの反応は、涙声のすがるような懇願だった。

お前の体をたっぷりと堪能したかったからだ、正直にそう言っつてやる代わりに一つ問いかける。

「そろそろ出そうだ。抜かないといけないな?」

「だ、だめっ!中につ、私の中にください…っ」

ろくに力の入らないガクガクと震える足で、一生懸命に腰を固定しようとしてくる。

別にそれを払いのけることなど造作もないが、その様がとても可愛らしくて、気づけば自然と互いの指を絡ませていた。

この女に深く愛されているのは、もう疑いようがないほどよくわかった。

そして自分もまた、刀奈を誰よりも愛している。

だから一瞬の迷いも、戸惑いも、案じることすらも必要なく、即答で返事を返すことが出来た。

「わかった。責任はとってやる」

清々しいほどに潔く、気持ちがいいぐらいにきっぱりと言いきられた言葉。

「——っ！」

刀奈がそれに息を呑んだ次の瞬間、男根から精が勢いよく吐き出される。

「うあああああっっ!?!」

まるで男の持つ濃密な気力まで同時に放たれたような激流は、その狭い膣内をあっという間に支配し侵略する。

もともと限界の近かった刀奈は一切抵抗など出来るわけもなく、最後に一際大きく鳴いてそのまま気を失った。

## 9話

生徒会の仕事を終えて、部屋に持ってきた刀奈が入口のドアを開けて中に入ると、とたんに後ろから強烈な怒気が放たれる。

ゾクゾクゾク

今まで経験したこともない、あまりに威圧的な、もはや暴力的なまでのそれに、刀奈は身震いしその場に立ちすくんでしまう。

「さて、更識刀奈」

「は、はいっ……!」

後ろから聞こえてくる普段より低い男の声に、刀奈は怯えたように返事を返す。

そして制服をあつという間に脱がされると、ブラもストッキングも簡単にとられてしまう。

「なっ、なんで、こんなこと……」

「わからないのか、お前は……」

男はピンク色のパンツ一枚になった刀奈を、黙ってベッドへと軽く押し倒す。

そこでようやく先程までの怒気が消え、刀奈の体が自由に動くようになった。

「ど、どうして、怒ってるのかな……?」

「ほう、心当たりがないと……?」

「な、なな、ないわよっ!ほ、本当にないわ!」

両手で胸を隠しながらおそるおそる問いかける。

少しだけいつもの調子を取り戻した刀奈だが、それでも焦りは隠せない。

しかし男は理由をなかなか答えず、そのまま少しずつ距離を縮め、刀奈をベッドの奥へとじりじりと追い詰めていた。

「ラウラにくすぐり地獄とやらをしたらしいな?こっちに苦情が来てさ、怒られちゃったよ」

「なっ!?そ、それだけ?それぐらい、いいじゃない。あの子の反応が、面白いんだから!」

「明かされた理由を聞いても、全く悪びれもせず、そんなことを言う刀奈。」

男はその言葉と態度に大きいため息をつくとき、ここで今回の主旨を切り出した。

「じゃあ俺がお前で遊んでも、別にいいんだよな。お前の反応が面白いから」

「うっ…」

「だめじゃない。オイタしちやあ」

「うう…」

怒っていたはずの男は、とても楽しそうに笑う。

そして痛いところをつかれて、ぐうの音も出ない刀奈の手首を、タオルで簡単に縛ってから寝かせた。

「やつ、ま、待ってっ、や、やつぱり、謝るっ、謝るから…」

「いいよ、謝らなくて。だけど水くさいな、地獄のことなら俺に言え。」

…俺は地獄のプロなんだ」

「ひゃんっ!?!」

ツツツと首筋から肩にかけて、撫でるように指をそつと滑らせていく。

それは体にギリギリ触れているような、そんな絶妙なさわり加減。

「あつーそ、それっ…だめっ!」

滑らかに動くその指の感触に、仰向けになっている刀奈がビクビクと体を震わせる。

「俺がいいと言うまで動くな」

そう言いながら、邪魔をしようとする刀奈の縛られた手首を掴んで、再び頭の上へ持っていく。

「そんなんっ…」

すっかり本気で困惑している刀奈へと、黙って鋭い視線のみを向ける。

逆らうことなど許さない、上から見下ろす男の目は確かにそう言っていた。

「やつ…んツ、くうっ…」

桜介の武骨な指が、引き締まった白い脇腹を行ったり来たり往復する。

さすがに多少のくすぐったさはあったが、触れているのが焦がれた恋しい男の指だと思うだけで、もう刀奈は全身が性感帯だった。

動かないように言いつけられている刀奈は、目を瞑ってただただ身悶えし、ブルブルと体を震わせる。

「あ、ああ……ごめん、なさいっ、もう、やめるから……っ」

「やめなくていい」

「ん……っ！んんっ……！もっ、やめるっ……！は、反省するう……」

「しなくていい」

正直こんな風にされるぐらいなら、全身縛られて身動きがとれない方がまだましだった。

どうせ逆らうことなど出来やしないのだから。

「あやまるから……っ。あやまるからあー！」

もう刀奈は知っている。

桜介がその気になれば縛ったりするどころか、動くなど命令する必要すらないことを。

「久しぶりにしつけ直してやろうか」

北斗神拳伝承者は全身のあらゆる秘孔（ツボ）に精通している。気をもつてそれをちよつとつついてやれば一切触れることもなく、一時的に動けなくすることも、快楽を一時的に高めて超敏感にすることも、文字どおりおもちゃにすることだって息をするようにたやすく出来てしまう。

「い、言うとおりにする、言うとおりにしますからっ！だめよお、あんなの……！」

刀奈はあれを思い出すと、怯えながらひたすらに懇願する。しかし動けるのに動かないように我慢する方が、縛られて動けなくされるよりも実はずっときつい。

どうしたって敏感な柔肌を指が通過するたびに、体がびくんと反応してしまう。

「動くなどそう言ったよな？」

「あつ、あつ、あつ、む、むりつ、そんなの、むりつ、むりい……！」  
首を横に振りながら弱音を吐く刀奈に、そんな泣き言は聞きたくない  
いと男も黙って首を振る。

別にはじめから、弁解も、謝罪も、反省も、なんにも求めてはいない。  
「あああつーもお、だめつ、だめつ……！」

へその周りを撫でられているだけで刀奈が達してしまいそうにな  
った時、お腹の上で指が急にピタツと止まる。

「あつ……！」

もともと男には犯す気はない。これはあくまでも遊び。ただこの  
女を思いのままに弄びたいだけ。

お前の反応が面白いから遊びたいと、最初からそう言っているの  
だ。

「反省するんじゃないのか。不謹慎だな、感じちゃうなんて」

さつきはしなくていいと言ったくせに、今さらそんな意地悪を言  
う。

いいところで中断された刀奈が視線を向けて睨むと、桜介は微笑み  
を返し、今度はその華奢な首筋に口をつけて舌を這わせた。

「睨むなよ……。興奮しちゃうだろ」

「やあつ……いな、舐めないで、まだお風呂入ってないからっ」

もともと気の強い女が好きであり、そんな風に睨まれるとそれだけ  
で高ぶる。ここでもう少し雰囲気を出そうとポケットからハンカチ  
を取り出して両手を拘束。自分的にはどうでもいいことだが、これは  
相手に効く。思ったとおり、ろくな抵抗もせずにそれを受け入れる刀  
奈。言葉とは裏腹にどこまでも従順だった。

そしてそのまま愛撫を再開すると、その白い首筋からはたしかに少  
し汗をかいているような、そんな味がした。

「お前の味がする」

「ば、ばかっ……！」

犬並みの嗅覚を持つ桜介の舌が、少しずつ臭いの強い方強い方へと  
進んでいく。

やがて舌が腋の下に到達すると、刀奈は足をバタバタさせて身をよ

じり始めた。

「あんまり暴れるなよ。品がないぞ、品が」

「ひっ、ひんっ…！そんな、ところっ、き、きたないわっ、やっ、やめなさいっ」

「そう、品だよ、品」

刀奈は両足を片手で押さえられると、今度は腰を浮かせ始めた。

桜介はそこに体重をかけてそれも阻みつつ、刀奈の汗ばんだ腋をチロチロと舐めていく。

「ひ、あっ…！も、もお、おいた、しませんっ、うう、ほんとよ、ほんと、ほんとにしなっいっ」

「しっ…い」

抵抗を全部押さえつけ、懇願も全部はねつけてねちっこくそこからわき腹にかけていったり来たりなめ続ける。

そして桜介が反対側の腋へと舌を伸ばした時には、刀奈はすでに抵抗もなくなっていた。

「あ、あ、あはあ…あっ、あは、あううう…！」

もう自分でもわけのわかっていないような声をあげて、ひたすらに悶えている刀奈。

それでも唯一履くことを許された薄ピンクの下着は一度も触れられていないにも関わらず、まるで漏らしたようにグツチヨリと湿っていた。

## 10話

今は放課後、そしてここは生徒会室。

「会長、どうかしましたか？」

なにやら先ほどから、ずっと机に伏せて震えている刀奈を心配して、虚が声かける。

「だっ、だい、大丈夫っ……！」

刀奈は起き上がると、真っ赤な顔でなんとかそれに返事を返す。

「そうですか？」

「はあはあ……。へ、平気だ、から！」

「少し息も荒いですし、これは保健室に行った方がいいかもしれないね」

その普段と違う様子に、いよいよ心配になった虚が刀奈の席に近づこうとする。

「こ、来ないでっ！わ、私っ、私は大丈夫だから！」

まるで歩み寄る虚をこれ以上寄せ付けないかのように、突然刀奈は声を荒げる。

「……わかりました。でもあまり無理はしないように、気をつけてくださいね」

あまりの迫力に、これ以上の問答を控えて虚がそこから離れていく。

「虚さん、俺があとで保健室連れて来ますよ」

「ええ、ありがとう。霞くん、それじゃ、あとはよろしくね」

虚は桜介にあとを任せると、空気を読んだのかそそくさと生徒会室から出ていった。

「さて、刀奈ちゃん。きちんと今日1日、言い付けは守ってたみたいだな」

にっこり笑いかけられると、刀奈は目に涙をいっぱい浮かべて睨み付けた。

「こ、こんなこと、させるなんて！ひっ、ひどいわ、こ、この、へ、変態っ」

刀奈は憎まれ口を叩くが、そこにいつもの勢いはない。その様子はまるでなにかに怯えているようだ。

「お前の方が変態だろ？自分でそんなものを買ってるぐらいだからな」

桜介が手元のリモコンをピツピツと操作しながら、呆れたように言う。

「あああ！あああ！あ、あ、いやあ！と、止めなさい…っ！」

「お前が変態だろ？」

「ああっ、いや、いやっ！へ、変態です、変態ですからっ！と…止めて、止めてください!!」

叫びながら、再び机に伏せてしまう刀奈。

「じゃあおいで、こっちに」

「やつ…」

優しく呼び掛けられたのに、刀奈は怯えたようにビクリと体を飛び跳ねさせる。

「いいから来いよ」

「あう…あ…うう…」

しかしはつきり命令されると指示に従って、たどたどしい足取りでソファに向けて歩き出す。

「さ、見せて」

「うう…」

促されると、刀奈は顔を真っ赤にさせながらも、言われた通りにスカートをたくしあげる。

「スクール水着かな、これは」

「だって、だって染みちやうからっ」

そんなことを言うが、水着もすっかりと股の部分が湿って変色しており、太ももを伝って足元まで愛液がだらしなく垂れてきている。

「しつかりと啜えこんでるみたいだな。お前は本当に、いやらしいよ」

「あんっ…いやっ…いやめて…っ！」

股のところで指をクニクニさせながら、呆れ顔で言われて、それが羞恥心をさらに刺激する。

「さすがにこれはえぐいな、見た目もさ」

刀奈はどうやら、あそこに異物を挿入されているようだ。その証拠に水着の秘所のところが、歪な形に膨らんでいる。

「あつ、あなたが、やれって…！あつ、やめてええ！あ、あ、ああ!!」  
股布を上引つ張りあげられると、刀奈は簡単に達してしまふ。部屋に響き渡るような大きな悲鳴をあげて、そのまま男のからだに寄りかかる。

「あれ、そうだっけ？でもいつもやってるんだろ、こんなもの持ってるぐらいだから」

桜介はなおもグイグイと股布を引つ張りながら、たんたんと問いかける。

「ひいーち、違うっ…！きよ、興味はあつたのっ！でも、っ、使って、なかつたのよお！」

今にも泣き出しそうに顔を歪めて、身悶えしながらも必死に言い訳を始める刀奈。

秘所に挿入されているのは、リモコンで振動を操れるだけでなく、亀頭部分が左右に回転し、クリバイクが細かな振動を始める高級バイブ。

男性器の形をしたそれを、刀奈は股間にきつちりと根本まで突っ込まれていた。

「ま、どうでもいいな。とりあえずさ、このままお部屋までお散歩しようか」

桜介の腕にしがみついて、刀奈は廊下を内股でゆっくりと歩いていく。

さすがに羞恥心からか、最初は抵抗した刀奈だったが、部屋に着いたらご褒美に抱いてやる。そう言われると、理不尽な命令にもおとなしく従った。

「あ、う、あ」

「もつと早く歩いてくれるかな」

桜介は腕を引いて、どんとと先へ進みだす。

「うう…ぐすつ…うう…」

下を向いたまま泣きべそを掻いて、ガクガクと震える足で懸命に歩く刀奈。

もちろんスク水越しの股間には、いまだ高級バイブが刺さったままだ。

「お前がこんなもの買ったのはさ、これを使って遊んで欲しかったんだろ」

「か、返さない！そのリモコンをつ」

「ふーん、もう一回言って？」

「お願い、返して…」

「だめだよ、わがままいっちゃあ」

泣いていようとも、桜介は本気で取り合わない。

それにわざわざコード式ではなくリモコン式を買ったのは、やっぱりそういうことだろう。

「わ、わがまま…じゃない…っ」

実際に部屋でそんなものを見つけて、自分が刀奈で遊ばないはずがない。そういえばと、最近あんまり構っていなかったのを思い出す。

いまだ未使用だったのも、わりと見つかりやすいところに置いてあったのも、全ては自分に使わせるためだと思えば納得がいく。ただ弱音を吐いている様子を見るに、どうやら刀奈が思っていたよりも、ずいぶん刺激が強かったようだ。

「あ、そう。刀奈は悪い子だったか？」

「ち、違いますっ！ごめんなさい…っ」

不満もなにもないようなので、そのまま刀奈を引っ張って歩いていると、離れたところからこちらに走ってくる女生徒が数人視界に入る。

「ぐすつ…。もうこんなやあー！」

「こんなのって、刀奈の好きなちんちんだろ」

「ち、違うもんっ、こんな玩具じゃ、いやあ！あ、あなたの、おちんち

んが いいんだもん」

こんな風に甘え泣きするぐらいだから、刀奈はまだ気づいていないんだろう。ずっと泣き顔を下に向けているからそれも仕方ないが、今走ってきているのはおそらく生徒会長の座を狙う輩。

「まったく…。とんだ慌てん坊さんだ。それよりほら、今日も挑戦者がきたぞ」

しかしあの生徒たちじゃ、刀奈の相手には少し物足りないんじゃないだろうか。

それによく考えたら相手はISも持っていない。これはハンデが必要だな。

そう思っ、待機状態のISを取り上げたうえで、リモコンを操作してみることにした。

「あう！ひっ！うああ！」

「でもお前なら楽勝だよな。そんな玩具じゃ感じないだろうし。頑張れ、生徒会長。俺は離れたところで見てるから」

急にスイッチを入れられて、その刺激にまた達してしまい、その場に座り込んでしまう刀奈。

「あつ…い…あ、あ、ああつ…い！」

精一杯立とうと踏ん張るものの、刀奈はどうやら足腰がたたなくなってしまったようだ。

少し厳しいようだが、これはもともと女同士の勝負。これ以上水を差すのも無粋だろう。

だからその場に刀奈を残して、桜介は廊下の端に退こうとする。

「ま、待って！待ってえ！いかないでえ!!」

もう号泣している刀奈が必死に手を伸ばしてる間にも、刺客はだんだんと距離を縮めていた。

「刀奈ちゃん、どうしたの？」

「うう、わ、私、もお、た、戦えないのっ」

「それで、どうして欲しいのかな」

しゃがみこんで、床に尻餅をついている刀奈に目線を合わせ、頬に手を当てて優しく問いかける。

これはもう端から見れば、ただいじめているようにしか見えないだろう。

しかし実際にも、完全にその通りだった。

「ひ、ひつく、うう、た、助けて、ください…」

「もう、甘えん坊さんなんだから。いいよ、助けてあげる」

普段はクールを気取っている女の嗚咽混じりのお願い。

それならばと、かばうように前に立つ。

すると刺客はすぐに諦めたのか、きた道をそのまま引き返していく。この男とまともにやり合おうなどという女子は学園にはもう誰一人いない。

「お姉さんなんだから、泣かないの。立たせてやろうと思ったけど、やっぱりハイハイにする？」

自力で立てない立無さんに、手を差し出して立たせようとする姿は一見紳士的にも見える。

「うううううつ、普段は優しいからと思ってたけど、やっぱり鬼畜よお！こんな、こんなあ!!」

しかし、もうすっかりいじめっ子モードに入っていた。別に遊びの女というわけではないが、今やっているこれは完全に遊び。しかも遊び道具まで用意してもらっている。いわば私で遊んでくださいとお願いされたも同然なのだ。女にここまでさせて、最後まで遊んでやらねば男が廃るし、失礼にもあたる。こうなったら泣こうが喚こうが、途中でやめるつもりはない。それが寂しい思いをさせてしまった女へのせめてもの償いだろう。

事実、刀奈はこの後部屋に帰ってからも一晩中責められ続けることになる。